

アリストテレス『形而上学』A（第一）巻第四章～第七章 ——訳と注解——

Aristotle's *Metaphysics* A 4-7: Translation and Commentary

坂 下 浩 司

Koji SAKASHITA

凡 例

この翻訳の底本は Primavesi 2012 であり, Ross 1924 および Jaeger 1957 と比較した。邦訳は、『形而上学』については, 全訳2種(岩崎訳, 出訳), 部分訳1種(藤澤訳)を参照した。その他は, 基本的に, アリストテレスは, 京都大学学術出版会の「西洋古典叢書」にあるものはそれを, その他は岩波書店の「新・アリストテレス全集」版を, ソクラテス以前哲学者の「証言」や「断片」は, 同書店の『ソクラテス以前哲学者断片集』を, プラトンは, 前記「叢書」にあるものはそれを, その他は岩波書店の「プラトン全集」を, 上記の哲学者以外の著作家の邦訳は, 「叢書」版を, そこにないなどの場合は岩波文庫版を用いた¹⁾。

1) 謝辞: 今回の拙訳のモットーとなった考えの一つは, 紆余曲折を経ながらも翻訳経験を通じて自分の文学の主題とそれを適切に扱える方法・文体を発見し, ようやく五六歳頃から苦み (Saba, 1945/2014, 88: “Dopo la tristezza” の詩語を借りれば ‘l’amaro’) のある優れた随筆を書き始めた, 須賀敦子さんの若き日——一九六〇年代のコルシア書店時代——の言葉「漢語のぎっしりとつまったむずかしい……文章に, 今日の時代に生きる私たちに
になにかそぐわぬものを感じる……。……。それは, 食^レべるとか寝^レるとか云った, ごく基本的な人間の活動とおなじ
よう……でなければならぬはず……。それがふだんは見たこともない……ことばに溢れているのでは, まったく困
ったこと……」(須賀 2000/2008, 209-210)であった。これは, 直接には外国語の祈りの言葉の日本語訳について言
われているのだが, そのまま愛知(ピロソビア)の言葉の翻訳についても当てはまるのではあるまいか。ただ私は,
祈りの言葉や愛知の言葉の訳が日常のものであってほしいと願っている一方で, 多和田葉子さん——独特な「翻
訳家小説」を書いた——の言う「[[翻訳の中に]ぬ^っと出てくるもの」(多和田 1993/1999, 45)という非日常的な
ものを待ってもいる。これらの両立困難な志向性を保ちながら, この翻訳はなされる。今回の草稿についても, 2021
年度春学期の学部の授業「応用哲学B(現代形而上学と古代形而上学)」で, この原稿を試用し音読してもらった(残
念ながら第五章まで)。院生の野村雄一さんとソクラテス以前の哲学(古代原子論)が専門の和田利博さんにも感
謝いたします。

第四章

[984b23] しかし、次のような疑問をもつ人がいるかもしれない。すなわち、ヘシオドス²⁾が最初にそのようなもの³⁾を探求したのではないか、他にも誰か「恋（エロス）」ないし欲望を、存在するもののうちに始原として立てた人たちのうちにいるのではないか、たとえば、パルメニデスもそうではないか、というように。実際のところ、彼も世界万有の生成を構想してこう言っている。すなわち、初めに⁴⁾「[女神は] あらゆる神々のうちでエロス（恋）を工夫して創りたもうた⁵⁾」のだと。そして、ヘシオドスは、

あらゆるもののうちで一番初めに生じたのはカオス　しかし次には
胸広きガイア……
……
そしてありとあらゆる不死なるものたちの中でも際立つエロス⁶⁾

と語っているが、この詩行が暗示するのは、[984b30] 存在するものの中には、何らかの原因が、つまり事物を動かしてまとめていく原因⁷⁾がなければならぬということだ。

それで、誰が最初の人なのかということについて彼らをどのような順位に配すべきなのかは、後で判定することがゆるされるとしておこう⁸⁾。しかし、自然⁹⁾のうちには、善きものとは反対のものもまた明らかに存在しており、つまり秩序と[985a1] 美しさだけではなく無秩序と醜悪さもあり、

2) 前八世紀末頃の叙事詩人。ホメロスと並び称される巨匠として古代世界ギリシアにおいて大いに尊重された。『神統記』と『仕事と日々』の二編が残っている。

3) ここで「そのようなもの」とは、前章の最後（九八四b一一―一二）に出てきた、アナクサゴラスの「ヌース」に関する議論を受けて、「善く美しい状態にあること」と「善く美しくなること」の原因であるようなもののこと。

4) すべての写本の読みであるこの「初めに（プロトン）」は、「一番初めに（プロテイストン）」というパルメニデスの言葉とは異なっており、プラトン『饗宴』一七八Bに基づくアリストテレスの自由な引用とも考えられている。

5) パルメニデス「断片」一三（DK）。主語は不明だが、女神アプロディーテーか。この詩行の引用は『饗宴』一七八Bにならったもの。

6) ヘシオドス『神統記』一一六、一一七、および一二〇行目におおよそ対応する（アリストテレスは記憶で引用したと考えられている）。この引用も『饗宴』一七八Bにならったもの。ここで、「一番最初に生じた」のはカオスであり、カオスの方が始原的であるように思えるかもしれない。だが、おそらく、「ありとあらゆる不死なる神々の中でも際立つ」点で、エロス（ヘシオドスでは短母音の「エロス」）の根本性つまり始原性が確保されると解したのだろう。本巻第八章九八九a一〇―一一におけるヘシオドスへの言及も参照。なお、ヘシオドスは、本書では、それ以外に後一回、B（第三）巻第四章一〇〇〇a九に登場する。

7) 善く美しいことの始動因か。

8) 「後で判定する」とされたこの順位づけの作業は、アリストテレスの現存著作には見当たらない（約束ではなく打ち切りの言葉だったのかもしれない）。

9) 九八四b三三のこの「自然（ピュシス）」は、文脈的に、本章始め（九八四b二六）の「ト・パーン（世界万有）」の言い換えになっており、「自然世界」の意味がある。

また悪しきものの方が善きものよりも、そして劣悪なものの方が美しいものよりも、もっと多く存在しているので、そのようにして別の誰かが「愛」と「争い」を導入し、それぞれが前述のもの各々の原因であるとしたのだ。実際、人が、エンペドクレスの考えに付いていき、その真意を理解しようとはしても、彼の「たどたどしい¹⁰⁾言いまわし」に拘泥しないならば、「愛」が善きものの原因であり、「争い」が悪しきものの原因であることを発見するだろうから。したがって、もし誰かが、エンペドクレスは、「悪と善が始原である」と或る意味では¹¹⁾言っており、しかもそれを最初に言っていると主張するならば、おそらくその人は見事な仕方です語ったことになるだろう。あらゆる善きものの原因が「善そのもの」であるならば¹²⁾。

[985a10] たしかに、私たちが言っているように、彼らは、しかも以上のように説明されうる限りのところまでは、二つの原因をつかんでいたのだ。それらは、私たちが自然についての諸論考¹³⁾において規定しておいたいくつかの原因に属しているもので、すなわち「素材」と「その動の由来」である。しかしながら、彼らがそれらをつかむ仕方は、ほんやりとしており¹⁴⁾、つまりは全く明瞭さを欠くものであって、たとえて言えば、訓練を受けていない者たちが戦場ですることと似ている。つまり、これらの未熟な者たちでさえ、やたらと動き回って見事な打撃を相手にくらわせることがたびたびある。しかし、これらの者たちは知識に基づいてそうしているわけでもなく、また先の彼らも自分が述べていることを分かって述べている人たちとは似ても似つかない。実際、明らかに彼らは、前述の二つの原因を、ほとんどの場合で使っていないか、わずかな場合でしか使っていないかなのである。すなわち、アナクサゴラスは、世界を作り出すための仕掛けとして¹⁵⁾「知性」を用いている。実際、彼は、どのような原因のゆえに「必然的にそのようであるか」で説明が行き詰まってしまったとき¹⁶⁾ [985a20]、「知性」を導入している。しかし、他の数多くの場合においては、生じてくるものの原因をすべて「知性」以外に帰しているのだ¹⁷⁾。また、エンペドクレスは、アナ

10) 「たどたどしい」と訳した原語は「ブセリゼスタイ」。自分に先行する者をアリストテレスが取り扱う際の彼の不遜で傲慢な態度を如実に表すこの言葉が登場する箇所としてよく引用される（本巻の歴史的考察のまとめをする第一〇章九九三 a 一五でエンペドクレスを含めて再登場する）。詳しくは、「Met.A.4 補注 a アリストテレスが自分に先行する者を批評する際の言葉『ブセリゼスタイ』について」を見よ。

11) 「或る意味では」と付け加えられているのは、「[エンペドクレスのたどたどしい言いまわしには直接出てこないが] 或る意味では言っているのだ」ということ。アリストテレスが資料とそれに対する彼の解釈とを分けて考えることができていることを示す表現である。

12) 前章最後の議論九八四 b 一一―一二における「善く美しい」ことの原因の議論を最後に振り返っていると理解した。専門家は、「Met.A.4 補注 b984a10 の削除箇所 “[καὶ τῶν κακῶν τὸ κακόν]” (Primavesi 2012 が主張する “ α -supplements” の最初に論じられている例) について」を見よ。

13) 『自然学』第二巻第三章および第七章が該当する。

14) 「ほんやりとしている」の原語「アミュドロース」という副詞も、アリストテレスの歴史記述の態度を示す表現として受け取られてきた。本巻第七章九八八 a 二三と第一〇章九九三 a 一三において、ここと同じ文脈で再登場している。

15) いわゆる「機械仕掛けの神」。すなわち、ギリシア悲劇において機械仕掛けで突如舞台上に現れ、登場人物たちが行き詰まった場面を都合よく解決してくれる神のように、ということ。

16) 底本では「どのような原因のゆえに必然的にそのようであるか」という言葉が削除記号に入れられているが、Betegh, 133, n. 64 にならって残した。

17) ソクラテスがアナクサゴラスに失望したというエピソードを伝える、プラトン『パイドン』九八 B を下敷きに

クサゴラスよりは多くの場合にそれらの原因¹⁸⁾を用いているが、十分には使用していないし、それらの使用の間に整合性を見つけ出せてもいない。少なくともエンペドクレスにおいては、多くの場合、「愛」が分離させ、「争い」が結合させる。というのは、一方では、「争い」によって「一つの」世界万有が構成要素へと分解していくそのときに、「火」は「それだけで」一つに結合し、その他の構成要素も各々同じようになる¹⁹⁾が、他方では、ふたたび「愛」によってそれらが一つのもの²⁰⁾へと結合していくとき、各々²¹⁾からその諸部分がまた分離せられるのが必然なのであるから²²⁾。

それで、エンペドクレスは、彼以前の人たちとは異なり、この原因²³⁾を区別して導入した [985a30] 最初の人なのだが、動の始原を一つだとはせず、別々のしかも正反対の性格のものだとし、さらに「素材」の種類に入るものとして語られる構成要素を四つだと言った最初の人である（ただし実際には、四つではなく、二つしか存在しないかのように [985b1] 扱っている。すなわち彼は、火をそれだけで扱っているが、それに対置される土や空気や水を本性上一つのもものとして扱っている。人はこのことを彼のいくつかの詩行に基づいて見極め理解するだろう²⁴⁾。|| そういうわけで、彼は、始原を、私たちの言うように、以上のような仕方であり、以上のような数だけある²⁵⁾と語ったのである。

しかしまた、レウキッポス²⁶⁾と彼の仲間のデモクリトス²⁷⁾が、構成要素であるのは「充実体」と「空虚」だと主張している。というのも、一方を「あるもの（オン）」、他方を「あらぬもの（メー・オン）」だと²⁸⁾、つまりこれらのうち、「充実しており堅固なもの」を「あるもの」、「空虚²⁹⁾」を「あらぬもの」だと、まあ、こういった具合に語っているからである。（それゆえ彼らは、「あらぬもの」よりも「あるもの」がいっそう「ある」というわけではない³⁰⁾とさえ主張している。なぜなら、[彼

している。

18) 「素材」と「その動の由来」。

19) それぞれの種類構成要素がその種類だけで一つに結合すること。

20) ここでは「かたよりなく均質に混ざり合って一つになった世界万有」のこと。

21) 一つの種類構成要素だけで一つに集まったものの「各々」ということ。

22) 本書B（第三）巻第四章一〇〇〇a二五以下でも、エンペドクレスについて同じことが指摘されている。A巻の歴史的考察がB巻の「アポリアー（行き詰まり）」を考察し洗練させる作業と連動していることがうかがえる。

23) 「動の由来」。

24) エンペドクレスの現存の断片で該当しそうなものは六二番くらいで、しかも「火とその他の構成要素との対立」はこの断片ではそれほど明らかではない。アリストテレスは「いくつかの詩行」と複数形で述べており、彼の言うことをもっとはっきりと含意している、現在は伝わらない詩行が他にもあったのではないかと推測されている。

25) 本巻第三章九八三b一八の「始原の数の多さと種類」という、プラトンに由来する言いまわしに対応している。

26) 前五世紀頃、ミレトスの人。エレアに行ってゼノンに学んだとも言われる。原子論の創始者。彼自身の「断片」は、ほんの少ししか残っていない。

27) 前五世紀から前四世紀、トラキアのアプデラの人。レウキッポスの原子論を完成させた。多方面にわたって膨大な数の著作をした。残されている「断片」は、倫理関係のものが多く、原子論関係のものはむしろ少ない。

28) 原子論者とエレア学派のつながり || エレア学派の「存在一元論」への一つの対処として原子論が生まれたこと || を暗示している。

29) DKとその日本語訳では「空虚で希薄なもの」となっているが、有力な α 系写本にある「で希薄」を底本は削除しているので、岩波の『ソクラテス以前哲学者断片集』を使用されている方は注意されたい。

30) 「あらぬもの」は「あるもの」と同等に「ある」ということ。

らによれば]「空虚」よりも「物体」がいつそう「ある」というわけではない³¹⁾からだ。) 彼らは、これら³²⁾が、「あるもの」の「素材」としての原因だと言っているのである。[985b10] つまりちょうど、基底とされる³³⁾根本存在を一つだとする人たちが、これ以外のものを、これの「こうむる状態³⁴⁾」によって生ぜしめ、こうむった状態の始原として「濃密」や「希薄」を立てている³⁵⁾のと同じ仕方でも³⁶⁾、その違い³⁷⁾が他のものの原因であると主張している。しかしながら違いは三つあるのだと、彼らは言う。すなわち、「形」と「順序」と「置かれた向き」だ。実際、「あるもの」が異なる仕方は、彼らの主張では、「リュスモス³⁸⁾」によるか、「ディアテゲー³⁹⁾」によるか、「トロペー⁴⁰⁾」によるかに限られる。だが、これらのうち、「リュスモス」とは「形」、「ディアテゲー」とは「順序」、「トロペー」とは「置かれた向き」のことなのである。つまり、AはNと「形」によって、ANはNAと「順序」によって、ZはNと「置かれた向き」によって異なっている。[985b20] しかし、動について、これがどこから始まって、あるいはどのようにして「あるもの」に属しているのかという問題は、その他の人たちの場合と同様、彼らもまた重視せず、放置した⁴¹⁾。

さてそういうわけで、これら二つの原因⁴²⁾については、ちょうど私たちが言っているように、以上のことだけのことが私たちよりも先に探求されていたように思われる。

31) 「空虚」も「物体」に劣らず「ある」ということ。

32) 「充実体」(いわゆる原子)と「空虚」のこと。原子はともかく「空虚」が「素材」だというのは少し分りにくい、通常の物体は変化(のように見えること)が起こる限りでその中に原子と空虚を含んでいるはずだから、原子と空虚はそのような物体の「素材」となっていると言えよう。

33) 「基底とされる(ヒュポケイメネー)」は、ここでは「『素材』としての」という意味。

34) この「『素材』とそれの『こうむる状態』」という対概念の重要性について詳しくは、本巻第三章の九八三b一〇、第五章九八五b二九以下、そして九八六a一五―一七を参照。

35) アナクシメネス、アポロニアのディオゲネスなど。「濃密」や「希薄」は、本巻第九章九九二b四―五で再登場する。

36) レウキッポスとデモクリトスのこと。前例となる人たちが存在したことを含意する「も」がついた言いまわしが、次章九八六a一五にも登場している(後者の「彼ら」は「ピュタゴラス学派の人たち」)。

37) 彼らが「構成要素」だと主張するものの違いということ。

38) 「リュスモス」は、いわゆる古典ギリシア語(すなわちアテナイ方言)の語形「リュトモス」の通常のイオニア方言形(抒情詩人アルキロコス(62 Hiller)の七行目)などに見られる。「リュトモス」の通常の意味は「律動・リズム」であるが、ヘロドトス『歴史』第五卷五八やヒッポクラテス『関節について』六二では「形」の意味に用いられている(たとえばヘロドトスでは、フェニキア人の「文字の『形(リュトモス)』」をギリシア人は変えたと言われている)。

39) 「ディアテゲー」は、有力な α 系写本の読み。従来は β 系にしたがって「ディアティゲー」と読んできた(DKも同様である)。専門家は、「Met.A.4 補注 c985b17の「ディアティゲー」および「ディアテゲー」という読みについて」を見よ。

40) 通常の意味は「回転」。後で出てくるアルファベットの例における「置かれた向き」の違いは、その「回転」によって出来るものである。

41) 本巻第九章九九二a二五の「私たちは放っておいてしまった」の箇所も参照。

42) 素材因と始動因。

第五章

[985b23] しかし、彼ら⁴³⁾と同じ頃⁴⁴⁾、また彼ら以前に、いわゆるピュタゴラス学派の人たち⁴⁵⁾、種々の数学的研究に最初に手をつけた人たちが⁴⁶⁾、これらの研究を押し進めたのだし、またこれらの中で養い育てられたので、彼らは、数学の原理が、存在するすべてのものの原理であると考えてに至った。

[985b26] そしてそれらのうちで⁴⁷⁾、数が自然本性的に「第一のもの」であり、火や土や水のうちによりも⁴⁸⁾、数のうちに、「存在し生成するもの」との多くの「類似物⁴⁹⁾」を見届けられたように彼らには思われたのだ。すなわち、数の「こうむるこれこれの状態⁵⁰⁾」が「正義」であり⁵¹⁾、[985b30] これこれの状態が「魂」と「知性」であり⁵²⁾、別のそれが「時機」であって⁵³⁾、言わばその他の各々も同様だからだ⁵⁴⁾。さらに、協和音の「こうむる状態」つまり比⁵⁵⁾は数で表わされるのを観察して

43) 「彼ら」は、第三章以来取り上げられてきた人々ではなく、もっと限定的に、直前に論じられた原子論者の「レウキッポスとデモクリトス」と解する (Ross)。

44) 「同じ頃」と訳した原語は「エン」で、直訳は「の中で」になる。このように意識した理由について詳しくは、「Met. A.5 補注 a 九八五 B 二三の前置詞「エン」について」を見よ。

45) 原子論者と「同じ頃」(前五世紀)のピュタゴラス学派の人としては、ピロラオスがいる。

46) 文字通りに「数学を最初に研究した」という意味ではなく(それは歴史におかしいので)、Schofield 2012 にしたがって、もっと限定して、前章末尾で取り上げられた原子論者たちが取り組んでいた「コスモロジー(宇宙論)」を研究する手段として「種々の数学的研究に最初に手をつけた」と解する。詳しくは、「Met.A.5 補注 a」を見よ。

47) 九八五 a 一での反復の文章からすれば、「『存在するすべてのもの』のうちで」という意味 (Schofield 2012)。「それら」を「数学の原理(原文は複数形)」と解すること (Ross) も可能。

48) この箇所は、第三章で論じられたタレスなどの「素材」始原論とピュタゴラス学派の「数」原理論を比較している証拠となる (Schofield, 145-146)。つまり、ミレトス学派とピュタゴラス学派を同じ土俵にのせているのである。

49) 後(九八五 b 三三)の「似せられている」という言葉と関連がある。

50) 「こうむる状態」の原語は「パトス」。「数のこうむる状態」は分かりにくいだが、アリストテレスがピュタゴラス学派の人たちを論じるときのキーワードの一つ。この「パトス」について詳しくは、後の九八六 a 一五 | 一七とその箇所の訳注を見よ。また本巻第三章の九八三 b 一〇の「パテー」とその箇所の訳注も見よ。

51) 『ニコマコス倫理学』第五巻第五章一一三二 b 二一 | 二三に、「ある人たちには、『応報』もまた無条件に正しいものと考えられている。たとえばピュタゴラス学派の人びとが主張したように。なぜなら彼らは、『正しいこと』とは他者との応報関係である、と無条件に定義したからである」(朴訳に準拠。表記を一部変更)とあり、これは、ピュタゴラス派において「正義」が「等しい数を掛け合わせたもの(二乗・平方数あるいは正方形数)」として扱われることを含意する(「応報」は、二つのものの一方が他方を、他方が一方を扱うのと同じ仕方で、扱うことだから)。

52) アリストテレスの現存著作には「正義」の場合のような手がかりはない。「魂」は「知性」の意味で用いられており「知性」は「一」という数だとか、「知性」は「一」だが「魂」は「二」であるとか、魂は「四」だとか「六」だとか、証言が一致しない。彼の言葉は、「魂」も「知性」も同じ数で表されるということを含意している。それはおそらく「一」だっただろう。

53) これもアリストテレスの現存著作にはヒントはないが、「時機」は「七」だという証言がある。

54) たとえば、点が「一」、線が「二」、平面が「三」、立体が「四」、性質をもった物体が「五」、魂をもった物体=身体が「六」、知性をもった身体が「七」など。

55) たとえば、同一の強さで張られた同一の太さの二つの弦の長さの比が一对二の場合完全八度の音程の和音が、

のことなのだ。以上のようにして、数以外のものはそのものの自然本性の全域⁵⁶⁾にわたって数に似せられていると思われ、[986a1] また数は自然全体に関わる第一のものであると思われたので、数の根本要素が、存在するすべてのものの根本要素であると、つまり全天が調和すなわち数であると彼らは判断した。[986a3] そして、諸々の数と様々な調和のうち、天の「こうむる状態」や部分と、また全宇宙的秩序づけと一致する⁵⁷⁾ということを示せた限りの事例を収集し、彼らの考えに合わせたのである。[986a6] たとえどこかに何か[彼らの考えと現実との間に]ギャップが残ってしまっても、彼らは何かを付け加えて研究全体をそれら[現実]に合わせることに執着した。私が言っているのは、たとえば、「一〇」という数が完全な数である⁵⁸⁾以上、[986a10] 天に沿って動く星⁵⁹⁾もまた一〇個なのであると彼らは主張するわけだが、観察されるそういった星は九個しかないの、このような事情のゆえに一〇個目の「対地星」なる星を創作しているといったことだ⁶⁰⁾。これらについては、別のところで私たちはもっと厳密に議論しておいた⁶¹⁾。

[986a13] だが私たちが目下遂行中のこの考察の目的は、次のことを彼らからも⁶²⁾把握できるようになることだ。すなわち、彼らがどんなものを始原であるとしているのか、そしてそれが私たちによって述べられた諸原因⁶³⁾の中にどのようにして入ってくるのかということである。[986a15] それで、彼らも⁶⁴⁾数を以下のように考えているのは明らかだ。すなわち、それは、様々な存在にとつ

二対三の場合完全五度の音程の和音が出るなどのこと。

- 56) 以下、「全体」や「すべての～」「全～」という言葉が頻出している。おそらく第二章の知恵に関する「[判断一] その知識の対象が何にもまして『すべての事物[万物]』でありそれらを可能な仕方に対象としているのが『知恵ある者』だということ」と対応させているのであろう。
- 57) 「類似する」と同じニュアンスである。
- 58) 「一〇」が「完全」であることによく知られている理由は、「一と二と三と四を足すと一〇になるから」というもので、これを表す「テトラクテュス」という一〇の点で出来た三角形の図が有名である。
- 59) 惑星のこと。
- 60) 『天について』第二巻第一三章に「対地星」とそれに対するアリストテレスの評価についての重要な関連資料がある。「Met.A.5 補注 b『天について』第二巻第一三章の「対地星」についての資料」を見よ。
- 61) アリストテレスの今は失われた著作に『ピュタゴラス学派について』のあったことが知られている（岩波の新版「アリストテレス全集」第二〇巻に断片が収録されている）。
- 62) この「彼ら[ピュタゴラス学派の人たち]からも」とは、本章の冒頭における第四章の原子論者との対比、および先の九八五 b 二八 | 二九の「火や土や水のうちによりも」における第三章のタレスなどの「素材」論者との比較からして、「[[素材] 論者や原子論者からだけではなくて] ピュタゴラス学派の人たちからも」ということであろう。つまり、これらの三者がひとくりにされていることが暗示されている（Schofield, 145-146）。詳しくは、「Met.A.5 補注 c「素材」としての数、パテーとヘクセイスについて」を見よ。
- 63) 『自然学』の四原因のこと。
- 64) この九八六 a 一五の「彼ら[ピュタゴラス学派の人たち]も」も、先の九八六 a 一四の「彼らからも」と同じ含意をもつ（Schofield, 145-146）。

て「素材」として始原であり⁶⁵⁾、そして、「[[『素材』としての数の] こうむる状態⁶⁶⁾」や「[[数の] 恒常的な状態⁶⁷⁾」として始原であると。また、数の根本要素は偶数と奇数であり、これら的一方[奇数]が「限定されたもの」であり、他方[偶数]は「無限なもの」であると⁶⁸⁾。そして、「一」はこれらの両方から出来ており[986a20]（偶数でも奇数でもあるから⁶⁹⁾）、他方で数は「一」から出来ると。またちょうど先に述べられたように、全天は数⁷⁰⁾なのであると⁷¹⁾。

[986a22] 上記と同じ学派の別の人たちは始原を一〇個あると言っているが、「対になった系列」にまとめてそう言っているのである。すなわち、

限定	無限
奇数	偶数
一	多
右	左
男	女
静止	運動
直	曲
光	闇
善	悪
正方形	長方形

である。まさしくこの仕方でクロトンの人[986a30] アルクマイオン⁷²⁾も判断したようであって、

65) 数が「『素材』としての始原である」という言葉は理解するのが||従来の物質的ニュアンスが濃い「質料因」を用いて理解しようとした場合は特に||難しいと思われる。アリストテレスの強引な解釈である可能性は否定できない。ただ、この箇所は、次の「そして、[[『素材』としての数の] こうむる状態] や「[[数の] 恒常的な状態] として始原である」と密接に関係しており、こちらの「パテー」と「ヘクセイス」を理解することが、「数は『素材』としての始原である」という言葉の真意を探る上での重要な手がかりになるとと思われる。詳しくは、「Met.A.5 補注 c」を見よ。

66) 正義や魂や時機など。

67) 数それ自体の状態。

68) 『自然学』第三巻第四章二〇三 a 一三 | 一五で、このことの理由として、「一つのもののまわりと、それとは別に[二つのもののまわりに]それぞれグノーモーン（曲尺）型を取り囲むように配置していくと、後者の場合には常に違った形が生ずるが、前者の場合には一種類の形だけが生じる」（内山訳に準拠）ということピュタゴラス学派の人たちが挙げていたという証言がある（これはピュタゴラス学派の「証言」B 二八（DK）の一つ目である。この証言の二つ目と三つ目の資料も参考になる）。

69) 「一」は、ピュタゴラス学派の人たちによれば、「偶数（アルティオス）」でも「奇数（ペリットス）」でもあるので、「偶・奇数（アルティオ・ペリットス）」である。なお、「一」が偶数でも奇数でもある理由としては、「『一』は偶数に加えられると偶数を奇数にし、奇数に加えられると奇数を偶数にするから」、あるいは「『一』は偶数の始原であるとともに奇数の始原でもあるから」というものがある。

70) 比つまり数的調和。

71) ピロラオスの「断片」一（DK）に「宇宙内の自然は無限なるものと限定するものの調和から成り立っており、宇宙の全体もその中にあるすべてのものもそうである」（岩波版に準拠）とある。また「断片」五（DK）では、そのようなものの第一のものは「一」であるとされている。

72) 前六世紀末の医師。一般にピュタゴラス学派の人とされる（たとえば「証言」一（DK）では「ピュタゴラスの

彼が上述の人たちから、あるいは上述の人たちが彼から、この議論を受け取ったのである。実際のところ、アルクマイオンは彼らに似た仕方で意見を表明したからだ⁷³⁾。すなわち、彼は、人間に関わりのあることの多くが対になっていると主張する。ただし彼が挙げる「反対の性格のもの」は、ちょうど上述の人たちのように確定されたものではなく、たとえば、白・黒、甘味・苦味、善・悪、大・小などのように行き当たりばったりである。それで彼は、[986b1] 残りの反対のものについて限定しないまま放り出してしまった。他方でピュタゴラス学派の人たちは、反対関係になるものが「いくつあるのか」ということも「何であるのか」ということも、どちらもはっきりと意見を表明したのだ。

[986b2] さて、上述の人たちの両方⁷⁴⁾からは、反対のものが諸存在の始原であることを、他方の人たち⁷⁵⁾からは、それが「いくつあるのか」と「何であるのか」ということを把握することができる。しかしながら、どうやって、[彼らによって語られたそれを] 私たちによって先に述べられた諸原因と一まとめにする⁷⁶⁾ことができるのかについては、上述の人たちによって明瞭な仕方で表現されることはなかった⁷⁷⁾。ただし、その構成原理を「素材」の種類に入るものとして位置づけてはいるようだ⁷⁸⁾。実際、事物に内在するそれから根本存在が構成されており形作られていると彼らは主張するからである。

[986b8] それで、昔の人たちの考えや「自然の構成原理は一つより多い」と言う人たち⁷⁹⁾の考えを見極めることは、以上の考察に基づけばそれで [986b10] 十分である。しかし他方で、世界万有についてその自然本性が一つであるかのように意見を表明した | | それは見事さの点でも自然本性に即すという点でも全員が同じというわけではなかった | | 人たちがいた。だが、この人たちにつ

弟子」と言われている)が、アリストテレスはここで、「アルクマイオンも考えているようである」とか、「アルクマイオンは彼らに似た仕方で意見を表明した」とか、少し区別して論じている。

73) 有力ではない写本にはここに「ピュタゴラスが老年の頃」アルクマイオンは「年齢が〈若く〉」という言葉があるが、削除記号が付けられるのが常である。

74) 九八六a二二 | 二六で言及されたピュタゴラス学派の人たちとアルクマイオンのこと。ここからも、アリストテレスがアルクマイオンをピュタゴラス学派の人たちのうちの体系的な考察をする主流とは区別していることが分かる。

75) 前述のピュタゴラス学派の人たちのこと。

76) 「統一的に理解する」ということ。

77) 前章でアリストテレスが、先行する愛知者を批評する際に使用していた言葉「たどたどしい」(九八五a五)や「ぼんやりとしている」(a一三)の別のもっと詳しい表現。(「表現される」は、原語「ディアトルースタイ(直訳は「節を分けてははっきり発音される」「完全に分節化される。))」の意識。)[Met.A.4 補注 a アリストテレスが自分に先行する者を批評する際の言葉『プセリゼスタイ』について]を見よ。

78) ここでの「構成原理」は、直前に登場する「反対のもの」を指すとする解釈(Ross)もある。しかし、先に九八六a一五以下で「彼らも数を以下のように考えているのは明らかである。すなわち、それは、様々な存在にとって「素材」として始原であり」と言われており、またここでわざわざ(「始原」と同義に使われうる)「構成原理」という言葉を使ったからには、ピュタゴラス学派では「始原としての数」のことである(アレクサンドロス)と解する。しかし数がここで「『素材』の種類に入る(直訳は『素材(ヒューレー)の種(エイドス)の中(エン)にある』)」と言われているのはアリストテレスのとんでもない誤解だと思ったかもしれない。実際そうである可能性は否定できないが、先の九八六a一五以下の文と註を見られたい。

79) エンベドクレス、アナクサゴラス、レウキッポスとデモクリトス、ピュタゴラス学派の人たち。

いて議論することは現在遂行中の原因の考察に全く適していない。[986b14]（実際、この人たちは、ちょうど自然学者のうちの何人かが「存在するもの」を「一つのもの」であると想定しながら、それにもかかわらず「素材」からであるかのごとく「一つのもの」から生成させているような仕方ではなく、むしろ別の仕方語っている。すなわち、前述の自然学者たちは「動」を付け加えており、彼らは少なくとも世界万有を生成させようとしてこうするのだが、今話題にした人たちの方は、その世界万有が「動かされないもの」だと主張しているのだ。）[986b18]ただし、以下^{ことわり}のようである限りでは、現在遂行中の考察に適している。すなわち、パルメニデスは、「理（ロゴス）」の点で「一なるもの」に、メリッソス⁸⁰⁾は[986b20]「素材」の点で「一なるもの」に触れていたように思われる。（それゆえにまた、前者はそれが「限定されたもの」であると、後者はそれが「無限のもの」であると主張するのだ。）一方、クセノパネス⁸¹⁾が彼らの中で最初に（実際パルメニデスは彼の弟子だと言われている⁸²⁾から）「一なるもの」を唱えたのだが、明晰な意見表明はしなかったし、それら⁸³⁾のどちらの本性も把握はしていなかったように思われる。ただし、天全体に目を向けて、「一なるもの」が神であるとは主張している。

[986b25] それで、すでに述べたように、彼らのことは現在遂行中の探求との関係では脇へ置いておかなければならないし、そのうちの二人は完全にそうすべきでさえある。この二人の方には少々主張に粗さが目立つからで、つまりクセノパネスとメリッソスのことである。それに対して、パルメニデスの方は彼らよりずっとものをよく見て語っているところがあるようだ。なぜなら、彼は、「あるもの」と並ぶ「あらぬもの」など何一つ「あらぬ」のが当然だと考え、「あるもの」が必然的に一つであると、すなわち [986b30] [[あるもの]とは] 別のものなど何一つ「あらぬ」と思っている⁸⁴⁾からだ（このことについては自然についての論考の中で私たちはもっと明確に述べた⁸⁵⁾）。しかし他方で彼は、「明らかであること⁸⁶⁾」にしたがうのを強いられて、つまり理性にしたがえば一つのものが「ある」のだが、感覚にしたがえばそれよりも多いものが「ある」と想定して、彼はまたしても原因を二つ、すなわち始原を二つ立てて、それらを「熱いものと冷たいもの」、たとえば「火と土」として語っているのである。そして、これらのうちの [987a1] 一方 [熱いもの] を「あ

80) 前五世紀、イオニア地方のサモス島出身で、エレア学派の人。あまり独創性はなかったとされるが、パルメニデスの考えを整理し発展させ、後世への影響はむしろ大きい。

81) 前六世紀、イオニアのコロポンの人。エレゲイア詩や風刺詩を書いた詩人にして愛知者。当時のギリシアの伝統的な擬人神観を批判し、多神教的風土において唯一神の考えに到達した。

82) これをそのままに受け取る学者は現在ではない（アリストテレスも「と言われている」という慎重な言い方をしている）。

83) ロゴスと「素材」。

84) パルメニデスの詩の第一部「真理の道」において。

85) 『自然学』第一巻第三章など。

86) 「タ・パイノメナ [複数形<単数形『ト・パイノメノン』]」は、その形からも分かるように「現象（英語の phenomenon）」の語源。従来は「観察事実（observed facts）」と訳されたりしていた。しかし、現代のアリストテレス研究では、そのような狭い意味ではなく、動詞形「パイネスタイ」が、「明らかに～である」と「～と思われる」の意味をもつことから察せられるように、もっと広く、「明らかであること」や「思われていること（すなわち通念）」という意味に解されている。ここでは、「明らかである」という意味が強いと判断し訳文のように訳した。

るもの」の側に、他方「冷たいもの」を「あらぬもの」の側に割り当てているのだ⁸⁷⁾。

[987a2] こうして私たちは、以上で述べられたことから、またすでにこの議論に加わっている知者⁸⁸⁾たちから次のような考えを把握した。すなわち、一方で「一」最初の知者たち⁸⁹⁾からは、始原が物的である（水や火やそういったものは物体であるから）ということ、そして彼らのうちの一方「一 a」からは物的な始原が一つであるということ⁹⁰⁾、他方「一 b」からは一つよりも多いということ⁹¹⁾。しかしながら両者とも、それらの始原を「素材」の種類に入るものとして立てている。他方「二」で、その「[素材]としての」原因を立ててさらに「動が由来する始原」を立てる或る人たちから、つまり彼らの一方「二 a」からはこれが一つであることを⁹²⁾、他方「二 b」からは二つであることを⁹³⁾把握したわけである。

[987a9] さてそれで、イタリアの人たち⁹⁴⁾までは、つまり彼らを別にすれば、他の人たちは、以上のことについて比較的独自の仕方でも語った。ただし、ちょうど私たちが述べたように、彼らは二つの原因を使うはめになった。すなわち、そのうちの一方の原因つまり「動が由来する始原」を、彼らのうちの或る人たちは一つだとしており、他の人たちは二つだとしている。

[987a13] しかしピュタゴラス学派の人たちは、一方で「上記の人たちと同じように始原が二つであると語ったのだが、他方でただ彼らに固有であることも付け加えている。すなわち、「限定」と「無限」を、これらとは別の何らかの自然本性のもの、たとえば火や土や何かそういった種類の他のものであるとは考えず、「無限」それ自体や「一」それ自体を、これらが述語づけられる当のものの根本存在であると、それゆえ数もまた万物の根本存在であると考えたのである⁹⁵⁾。

[987a20] それで、彼らはこのような仕方でも意見表明したが、一方で「何であるかということ」についても語り定義し始め、他方でもあまりにも単純に考察対象を扱った⁹⁶⁾。すなわち、彼らの定義の仕方は皮相であったし、述べられた定義⁹⁷⁾が最初に当てはまるもの⁹⁸⁾を、その当の事柄⁹⁹⁾の「根本存在 [本質存在]」であるとみなした¹⁰⁰⁾。これはちょうど誰かが「『二』と『二

87) パルメニデスの詩の第二部「臆見の道」において。

88) ここでの「知者」は「知恵を愛し求める人」のこと。以下同じ。

89) 本巻第三章九八三 b 六の「最初に知恵を愛し求めた人たち」という言い方に対応している。

90) タレス、ヒッポン、アナクシメネス、ディオゲネス、ヒッパソス、ヘラクレイトス（九八四 a 二 | 八）、メリッソス（九八六 b 一九）のこと。

91) 「最初の知者たち」という言葉は時代的に合わないが、おそらくレウキッポスとデモクリトス（九八五 b 四 | 二〇）。

92) パルメニデス（九八四 b 三）、アナクサゴラス（九八四 b 一五 | 二二）のこと。

93) エンペドクレス（九八五 a 二 | 一〇）のこと。

94) ピュタゴラス学派の人たち。

95) 「万物に数が述語づけられる」という隠された前提がある。

96) アリストテレス流に言えば、定義は類と種差の複合なのだが、ピュタゴラス学派の人たちの場合、種差にあたるものが欠けており単純なのであろう。

97) たとえば、「正義」のピュタゴラス学派的な定義の場合、「等しい数を掛け合わせたもの」（先の註を参照）。

98) 「正義」の例を使いつづけると、「等しい数を掛け合わせたもの」が最初に当てはまるものは「四」（なお「一」は特別扱いされるのでここでは当てはまらない）。

99) 前註の例では、「正義」のこと。

100) すなわち、四が正義の「根本存在」となり、こうして「正義は四である」と言われるに至る。

倍』は同じだ¹⁰¹⁾。なぜなら『二倍』が最初に当てはまるのは『二』に対してだからだ』と思うのに似ている。だが、『二倍』であることと『二』であること』とが同じことであるはずはないだろう¹⁰²⁾。さもなければ、一つのもが様々な多くのものであることになってしまうだろうが、彼らに帰結したのはまさにこれなのだ¹⁰³⁾。

それで、私たちよりも以前の人たちや他の人たちから、これだけの見解を受け取ることができるというわけである。

第六章

[987a29] ここまでで語られてきた様々に知恵を愛し求める活動の後に、プラトンの取り組みが現れたのだ。[987a30] これは、多くの点で彼ら¹⁰⁴⁾の考えにしたがっているが、イタリアの人たち¹⁰⁵⁾の知恵の追求とは別の独自の点をいくつも有している。実際、若い頃からプラトンは、最初、クラテュロス¹⁰⁶⁾に、またヘラクレイトス風の「感覚されるものはどれも流転しており、それらについての知識は存在しない」といった見解¹⁰⁷⁾に親しんだのであって、一方では、これらの点を後になっても、[987b] そのままに想定していた¹⁰⁸⁾。他方で、[プラトンが次に親しんだ人物である] ソクラテスは、人間の品性に関わる様々なこと¹⁰⁹⁾に取り組みながらも、全自然については何ら取り組むところがなかった。しかしながら、前者の事柄において「普遍」を探求し、定義にこだわったもの考えた最初の人となった。プラトンは、その人[ソクラテス]を、以上のようなことのゆ

101) 『二 [という数]』は『二倍』である』ということ。

102) 先の「正義」の例で言えば、『等しい数を掛け合わせたもの』であること』一般とその一事例にすぎない『四』であること』とが同じことであるはずはなからうということ。

103) たとえば、「一」という数 [一つのもの] が「理性」でありまた「点」である [多くのものである]、「四」という数が「正義」でありまた「立体」であるといった考え（九八五b 二九以下と註を参照）。

104) 伝統的には、古註での整理された文（Alex., 49,18-19; Ascl., 45, 17）に基づき、「ピュタゴラス学派の人たち」のことだとしてきた（Ross, Tricot）。しかし、本章の冒頭にある「デ」は前章末尾「メン」と密接に関係しており、九八七a 二八の「私たちよりも以前の人たちや他の人たち」、すなわち本巻第三章から第五章までで論じられた愛知者たちのことだと解するのが自然で、ピュタゴラス学派の人たちも含まれ、伝統的解釈のように、直後に登場する「イタリアの人たち」を先取りして「彼ら」と言われているとしなくても済む。

105) 直前に登場した「彼ら」のうちの、「ピュタゴラス学派の人たち」のこと。

106) アテナイ出身で、紀元前五世紀後半のヘラクレイトス主義者。プラトンに同名の対話篇がある。

107) 「ヘラクレイトス風の」であって「ヘラクレイトスの」ではないことに注意。プラトンの若い頃に、このような「急進的流転説」の一種がヘラクレイトスに帰せられてアテナイの知識人サークルの中で広まっていたらしい。ただし、対話篇『クラテュロス』の対応する箇所からすると、もともとは、「すべて [万物は] 流転しており、どんなものについても知識は存在しない」といった、その対話篇で批判的に検討される極端な思想であり、「感覚されるものは」という重要な限定を欠いたものだったかもしれない。

108) この箇所は、Steel 2012, 171-174によれば、アリストテレスが、プラトンの『クラテュロス』を読んで書いたものであり、この話を師から直接聞いたなどと想定する必要はないのだという。

109) 原語は「タ・エーティカ」で、「エートス」すなわち「品性」の形容詞形を中性名詞化したもの（複数）。これが後にいわゆる「倫理（学）」になったが直訳した。

えに¹¹⁰受け入れ、次のように想定した。すなわち、そのこと¹¹¹が生じるのは、それが、別なものに属す何かについて、つまり「感覚されるもの」には属さない何かについてのものであるときだと。なぜなら、「感覚されるもの」が少なくとも常に変化している以上、そういったものに属す何かには「共通な〔普遍的な〕定義」があり得ないからだ。それでこの人¹¹²〔プラトン〕は、一方で、存在するもののうち、以上のようなものを「アイデア¹¹³」と呼んだし、他方で、すべての「感覚されるもの」はアイデアと並んで〔存在し¹¹⁴〕〔987b9〕しかもアイデアに基づいて語られると〔言った〕。すなわち、〔987b10〕〔互いに〕同名同義のものの大多数がアイデアによって存在するのは¹¹⁵〔アイデアの〕分有によるからだ¹¹⁶。しかし、「分有」に関して言えばプラトンは呼び名を変えただけである。〔987b11〕なぜなら、一方でピュタゴラス学派の人たちは、「存在するもの」が存在するのは数の「模倣」によると主張するが¹¹⁷、他方でプラトンは、その呼び名を変えて「分有」によってだとしているから。しかしながら少なくとも、彼らは、アイデアの「分有」や「模倣」とは何なのだろうかという問題については、〔987b14〕公の探求に残したのだった¹¹⁸。さらにまた、彼〔プラトン〕は、「感覚されるもの」およびアイデアと並んで、両者の中間に数学的な事物が存在するのだと主張し、この「数学的なもの」は、一方で永遠なものでありしかも動かされないものであるという点で「感覚されるもの」と異なり、他方で「数学的なもの」は類似したものが多く存在するのに対して、アイデアそれ自身はそれぞれに関して一つしか存在しないという点でアイデアと異なると主張する。そして、彼は、アイデアが他のものにとって原因であるのだから、アイデアの「構成要素」がすべての存在の構成要素であるのだと考えた。〔987b20〕それで、一方で「素材」としては「大と小」が原理であり¹¹⁹、〔987b21〕

110) ここは「以下のようなことのゆえに」と訳すことも可能で研究者の間で議論が分かれている。詳しくは、「Met. A.6 補注 a 『ディア・ト・トイウートン』の解釈」を参照。

111) 『『普遍』を探索し定義にこだわってものを考えること』と解する (Steel, 174, n. 21)。

112) ここは、Steel 2012, 174, n. 22 と共に、底本にしたがっていない。

113) 本章でギリシア語の「アイデア」が登場するのは、この九八七b八のみで、しかも単に「呼び名」である。本巻で次にこの語が登場するのは第九章。

114) ここで、「～と並んで」と訳した原語は前置詞「バラ」であり、「〔存在し〕」と訳した「エイナイ」をこの「バラ」に補っている。詳しくは、「Met.A.6 補注 b 九八七b八の『バラ・タウタ』の『バラ』について」を参照。

115) ここではギリシア語で「エイドス」という言葉（の複数形「エイデー」）が使われているが、慣例にしたがい、プラトンの場合はギリシア語の「アイデア」と区別せず一貫して「アイデア」という訳語を用いる。以降も同様。ただし本章に限って言えば、九八七b八以外はすべて「エイドス」である。

116) この一文は様々な読みの提案があり、解釈が非常に難しい。詳しい議論を知りたい方は、「Met.A.6 補注 c 九八七b一〇のアイデア論についての一文について」を参照。

117) これは他に証言がとれない。おそらくそのような主張がピュタゴラス学派の人たちによってなされたことはなかった (Steel, 182)。

118) 「気が付かなかった」「解決できなかった」というややネガティブなニュアンスで「未決定なままに残した」とも、「問題には気が付いていたが共同研究の課題を弟子たちに与えた」というポジティブな含意で「共同探求に託した」とも訳されうるし、またプラトンの『パルメニデス』に言及している (Allan 説) など議論があるため、直訳にしておく。ここでは、『魂について』第一巻第四章冒頭部四〇七b二九の似た言いまわし「公におこなわれている議論」(中畑訳)に合わせた。

119) 本書M (第一三) 巻第七章以下で登場する「不定の二」(アオリストス・デュアス)のことが、以下では単に「二」とのみ言われている。これは、数としての「二」のことでなく、「『二』を作るもの」であるがゆえの命名である

他方で本質存在としては「一」が原理であると考えた。[987b21] すなわち、あれら [[大と小]] から、「一」の分有によって、[987b22] アイデアや [アイデア的な] 数は成り立っているからであると¹²⁰⁾。しかしながら少なくとも、「一」が本質存在なのであって、一つのものだと言われる別の何かではないのだと¹²¹⁾彼 [プラトン] は言ったが、[987b24] これはピュタゴラス学派の人たちに酷似しており、また数が他のものにとって本質存在の原因である¹²²⁾ということも彼らと同様なのである。[987b25] しかし、無限なものを「一」として扱うかわりに「二¹²³⁾」を作り出し、無限なものは「大と小」から成り立っているとすること、これが彼に固有なことである。[987b27] そしてさらに、一方で彼は、数が「感覚されるもの」と並んで存在すると言うのに対して、他方で彼ら [ピュタゴラス学派の人たち] は、事物 [感覚されるもの] それ自体が数であると主張し、しかもこれら [[感覚されるもの] とアイデア] の中間に「数学的なもの」を立てない。

[987b29] それで、彼 [プラトン] が、「一」と [987b30] 「数」を、事物 [感覚されるもの] と並んで存在するとしたこと、つまりちょうどピュタゴラス学派の人たちのように¹²⁴⁾はしなかったこと、そしてアイデアを導入したことは、「言論の中での考察¹²⁵⁾」のゆえにそうなのであり（彼以前の人たちは問答法にあずからなかったのだから）、また彼が「二」を別の本質的存在としたのは¹²⁶⁾、一次的な数を除いて¹²⁷⁾、様々な数がその数 [[二]] からうまく自然本性にかなった仕方で生み出される様子が、[988a1] ちょうど「印影が刻みつけられる地の台」としての何か [[素材]] から生み出されるのに似ていることのゆえにそうしたのである¹²⁸⁾。しかしながら、現に起こっている

（一〇八二 a 一三 | 一五参照）から、簡便だがまぎらわしい表現である。本章の以下の議論でも、「大と小」としての「(不定の) 二」を、わざとなのか勘違いなのか、数としての「二」のように扱っていると思われる箇所がいくつか見られる。

120) この箇所は、本巻第九章九九一 b 三一 | 九九二 a 一、a 一 | 二で前提とされる重要な考えが述べられているが、やはり様々な読みの提案が出されており決着はついていない。ここでは底本にしたがわず、Steel が支持する Reale 案を採用し、「カイ」を補った。なお、ここでの「数」は、アイデア的な数だと解されている。Reale の考えについて知りたい方は、「Met.A.6 補論 d 九八七 b 二二における『アイデア』と『数』について」を参照。

121) 「一」それ自体を分有することによって「一」と言われる場合、つまりアイデア以外のものが「一」と言われる場合はここでは該当しないということ。

122) 「他のものにとって本質存在の原因である」とは、他のものが何であるかというその本質を規定する原因であるという意味に解した。「の」を同格的に「という」の意味にとって「本質存在という原因」すなわち「形相因」と理解する解釈もある (Menn)。

123) 先の「大と小」を指す。いわゆる「不定の二」。

124) 事物それ自体がそのまま数であると主張したということ。

125) プラトン『パイドン』九九 D | 一〇〇 A への言及。

126) 「[[二]] [[大と小]]」を [[一]] とは 別の本質的存在としたのは」ということ。

127) 「一次的な数」とは素数のこと。なお、この「除いて」という限定は、プラトン主義者のそれではなく、アリストテレスのものだと解されている。

128) プラトンの現存著作には、ここでのアリストテレスの記述にそのまま対応する箇所は見いだされない。ただし、「印影が刻みつけられる地の台」の原語「エクマゲイオン」は、本書ではここにしか登場しない言葉で、おそらくプラトンの『ティマイオス』五〇 C から（また動詞形の「印影が刻みつけられた (エクマゲーナイ)」が『テアイテトス』一九一 D 以下の「記憶」の議論に登場する）。プラトンの力点は形やアイデアを「エクマゲイオン」が受け入れるという「受容性」にあるので、ここでの箇所のように、「エクマゲイオン」「から」生み出される・製作され

ことは正反対なのだ。つまり、以上のように考えることは理にかなっていない。なぜなら、現に次のようであるからだ。すなわち、一方で彼らは¹²⁹⁾「素材 [単数形]」から多くのものを作り出し、他方でアイデアは一度だけしか作り出さない¹³⁰⁾のであるが、しかし現実には明らかに、一つの「素材」から一つの机が作られているのであり、またその「[素材]」の中に「[机]」形を持ち込む¹³¹⁾者は一人であっても多くの机を作り出す¹³²⁾。そしてメスに対するオスの関係も同様である。つまり、一頭のメスは¹³³⁾一度の種付け¹³⁴⁾により孕まされる¹³⁵⁾が、一頭のオスは多くのメスを孕ませる¹³⁶⁾。しかも、これら「[机製作と種付けの事例]」こそは、あれらの原理「[一]と[二]」の模倣されたものなのだ¹³⁷⁾。それで、プラトンは、一方で、ここで探求されていること¹³⁸⁾について、このように規定した。他方で、以上で述べられたことから明らかなのは、彼が二つの原因、つまり「988a10」「何であるか」の原因と「素材」による原因しか使っていないということであり（実際、アイデアはその他のものにとって「何であるか」の原因であり、アイデアにとっては「一」がそうである）、そして基礎とされる「素材」は何なのかということ、すなわちそれについて、一方で「感覚されるもの」の場合にはアイデアが語られ、他方でアイデアにおいては「一」が語られるところの「素材」は何なのかということである¹³⁹⁾。（それが「二」であり、「大と小」なのだ。）さらにまた彼は、「善くあること」と「悪くあること」との原因の各々を、構成要素の各々に割り当てたが¹⁴⁰⁾、ちょうど私たちが主

るという意味の「素材性」ではない。しかし、素材性には「形の受け入れ」という側面も含まれており、アリストテレスの存在論的枠組みからすると「素材」として扱えるように見えたのであろう。

129) 「彼ら」はプラトンとピュタゴラス学派の人たちを含み、次の「他方でアイデアは」のところでプラトン独自の説が述べられていると理解した。

130) 「作り出す」と訳した原語「ゲンナオー」は、父親が子を儲けるときに使う動詞でもある。アイデアに父親的な役割を与えていることがうかがえ、次の二番目に登場する「オスとメス」の例に自然に接続する。

131) 原語「エビペロー」は「中へ運び込む・中へ入れる」の意味をもっており、次の「種付け」と「孕（はら）む」の話へ自然に続く。このあたりの生物学的な発想は完全にアリストテレス的になっており、この「エイドス」は事実上アリストテレスの用語の「形相」になっていると思われる。

132) この箇所「作り出す」は、一般的に「製作する」という意味の「ポイエイン」。「作り出すのは一人でだ」とは、作り出すのは「一度」きりではなく、また話の流れからして、「(一人で) 何度も」ということであろう。

133) 「メス」は単数、つまり素材を与える動物は一頭。先に出てきた「一つの素材」に対応する。

134) 「種付け」が、先に出てきた、形を素材の「中へ運び込むこと（エビペロー）」に対応する。

135) 先の「一つの素材から一つの机」の例と対比させると、一匹の子が宿ることに相当するだろう。

136) 先の「一人で（何度も）製作する」との対比では、一匹で何度も（多くの）子を宿らせるということになろう。

137) だから彼らが立てる原理へのこの例を用いた批判も有効であろうということ。

138) これは、素材へ形を運び込む人（製作の場合）やオス（生殖の場合）に着目しそれらをモデルにして生成一般を説明しようとする原因論のことではないか。そうでないと、プラトンが世界の||世界全体の、また世界内の個々のもの||動の原因・原理としての「魂」（こちらはそのような仕方では狭く限定される原因ではないであろう）を明らかに立てていることに、以下で触れられていないのを説明できないように思われる。

139) 「カタ（について）+ 属格」と「主格+レゲタイ（語られる）」を使ったアリストテレスの存在論上の重要な言いまわし「何かA（属格）について別の何かB（主格）が言われる」が登場している。この言いまわしは、「A」という言葉と「B」という言葉の結合つまり「AはBである」という命題のことだけではなく、何らかの意味で実在的なAとBの結合関係（これは本質的であったり偶然的であったりする）も表現する。

140) 「善くあること」の原因は「何であるか」としての「一」で、「悪くあること」の原因は「素材」である「二」ということか。

張しているように¹⁴¹⁾、知恵を愛し求めた以前の人たちも、そのうちの何人か、たとえばエンペドクレスやアナクサゴラスが探求したのだ¹⁴²⁾。

第七章

[988a18] さてこうして、私たちは、どんな人たちが、どのように、始原について、[988a20] また真実について述べたかということ、簡潔に要点のみ振り返った¹⁴³⁾。しかしそれにもかかわらず、以上から少なくとも次のような結論だけは得られる。すなわち、始原や原因について語る人たちのうちの誰一人としても、自然についての諸論考の中で¹⁴⁴⁾ 私たちによって区別された以外の始原・原因は述べなかった。むしろ明らかなのは、彼らがみな、それらに、ほんやりとした仕方ではだが或る意味では触れているということだ。実際、或る人たちは、「素材」として始原を語っている。そのような始原の数の想定が一つであるにせよ、もっと多いにせよ、また始原として立てるものが物体であるにせよ、非物体的にせよ。(たとえば、プラトンは「大」と「小」を¹⁴⁵⁾、イタリアの人たちは「無限」を¹⁴⁶⁾、エンペドクレスは火と土と水と空気を¹⁴⁷⁾、アナクサゴラスは数限りなく存在する「同質部分体」を¹⁴⁸⁾ 語っている。それで、これらの人たちはみな、以上のような原因〔「素材」〕に触れていたのであり、[988a30] さらにまた、空気や火や水、あるいは、「火よりは濃密だが空気よりは希薄なもの¹⁴⁹⁾」を語っている限りの人たちも同様である。実際のところ、或る人たちは¹⁵⁰⁾、第一の構成要素がそのようなものだと語ったのであるから。)

[988a32] それで、これらの人たち¹⁵¹⁾はその原因¹⁵²⁾にだけ触れていたが、他のある人たちは「動

141) 底本の α 写本の読み「ホベル(直訳は「ちょうどそれを」)・マーロン(「いっそう」あるいは「むしろ」)、特に「マーロン」をこの箇所ので意味になるように訳出することは困難であるとの Steel の判断にしたがう。ただし彼の訳にはしたがわなかった(「ホベル」だけは残して訳しているように読めたからである)。結局、従来の Ross の β 写本の読み「ホスベル(「ちょうど〜のように」)と訳し方をすることになった。

142) エンペドクレスは本巻第四章九八四 b 三二以下を、アナクサゴラスは第三章 b 一五以下を参照。

143) 本巻第三章九八三 b 一 | 三の「私たち以前に存在の考察へとおもむいた人たち、真実について知恵を愛し求めた人たちのことも取り上げよう」と対応する。本章は、第三章から始まった歴史的考察の一区切りとなっている。

144) 『自然学』第二巻第三章および第七章。

145) 本巻第六章九八七 b 二〇を参照。

146) 「ピュタゴラス学派の人たち」のことを言っている。本巻第五章九八六 a 一九を参照。

147) 本巻第三章九八四 a 八 | 九を参照。

148) 直訳は「『同質部分体』の無限性(アペイリアー)を」だが、本巻第三章九八四 a 一一 | 一三の「始原は数限りなく(アペイルース)存在すると[アナクサゴラスは]主張している」に合わせ、また次の「以上のような原因〔「素材」〕の話題へなめらかに移行するように意識した。なお、「同質部分体」は、上述の箇所のすぐ次の九八四 a 一四で登場していた概念。「Met.A.3 補注 c」を参照。

149) 同じ言葉が『自然学』第一巻第四章一八七 a 一五にもある。

150) 濃縮化と希薄化の理論装置を考案したのはアナクシメネスだが、おそらく彼の学派に属する人たち。

151) イオニア学派の人たちのこと。

152) 「素材」のこと。

が由来する始原」にも触れていたのだ(たとえば「愛」と「争い」,あるいは「知性」,あるいは「恋¹⁵³⁾」を始原とする限りの人たちがそうである)。しかし、「これこれであるとはそもそも何であったのか」すなわち本質存在を明確に提示した者は誰もいない。だが,最大限に語っているのが,「[988b1] アイデアを立てた人たち」だ(すなわち彼らは,「感覚されるもの」にとってアイデアを,そしてアイデアにとって「一」を,「素材」としても「動が由来する始原」としても想定せず¹⁵⁴⁾ | |なぜなら彼らはそれら¹⁵⁵⁾を「動かないこと」すなわち「静止状態にあること」の原因だと主張するから | |,むしろアイデアを「それ以外のものの各々にとってこれこれであるとはそもそも何であったのか」として,また「一」を「アイデアにとってこれこれであるとはそもそも何であったのか」として提示しているからである)。

[988b6] また,彼らは,行為や変化や動の目的となるものを原因であると,或る仕方では語るのだが,そのようには,つまり[このような原因であることが]自然本性にかなっているような仕方では語っていないのである。すなわち,或る人たちは「知性」あるいは「愛」を語りながら,こういった原因を何か「善きもの」として立てはするのだが,しかし,存在する様々なもののうちの何かが,[988b10] 少なくともこれらを目的として存在したり生じたりするようにはなく,これらから動が始まるように語っている¹⁵⁶⁾。そして同じように,「一」あるいは「存在」がそのような¹⁵⁷⁾自然本性のものであると述べる人たちも,それが根本存在¹⁵⁸⁾の原因であるとは主張するが¹⁵⁹⁾,しかし少なくともそれ¹⁶⁰⁾を目的として[根本存在が]存在したり生じたりするとは語っておらず,したがってこの主張をする人たちは,「善¹⁶¹⁾」が原因であるということ,或る意味で「語っているが語っていない」ということになる。なぜなら,そのものを端的にそれとしてではなく,それがたまたまとっていた形態でしか語っていないからである。

[988b16] こうして,原因について,どれだけの数あるかも,どのような性質のものであるかも¹⁶²⁾,私たちの規定は正しかったのだということ,この点に関して,以上で取り上げた人たちもみな証人になってくれると思われるが,それは彼らが他の原因に触れることができなかったからであ

153) パルメニデスとおそらくヘシオドスのことが考えられている(本巻第四章冒頭部を参照)。

154) 「『感覚されるもの』の動はそもそもアイデア論が想定する説明対象ではない」ということを,アリストテレスが承知しているのをうかがわせる箇所。本巻第九章九九a—一において彼が「アイデアは『感覚されるもの』の動の原因ではない」と批判しているように見える箇所と比較せよ。

155) アイデアや「一」。

156) これらが目的因よりもむしろ始動因であるかのように語っているということ。

157) すなわち「何か善き」ということ(Ross)。

158) これは,本章九八八a三五の「本質存在」と,原語は同じ「ウーシアー」だが,意味合いは異なると思われる。なぜなら,次に「生じたり」と言われているのだが,本質そのものは「生じたり」しないはずだからである。したがって,「本質が『素材』と複合状態にあって生成消滅可能な存在」を表しうるように広く「根本存在」と訳した。詳しくは,「Met.A.7 補注 a 九八八b—三の「ウーシアー」の別の解釈」を見よ。

159) 拙訳は従来のRossの訳し方をしている。詳しくは,「Met.A.7 補注 b 九八八b—一 | 一三の別の訳し方について」を見よ。

160) 「一」あるいは「存在するもの」。

161) これは,段落の最初に登場した「行為や変化や動の目的となるもの」であろう。

162) 「どれだけの数あるかも,どのような性質のものであるかも」は,プラトン『ソピステス』二四二C五 | 六の「ある(実在する)ものが,どれだけの数あって,どのような性質のものであるか」に対応している。

る。そして以上に加えて、始原は以上のような仕方ですべてが、あるいは何らかの仕方ですのうちからどれかが¹⁶³⁾探求されるべきだということも明らかなのである。

[988b20] しかし、始原について彼らの各々はどうのように述べたのか、またその人はどのような立場をとったのか、始原について起こりうる種々の「行き詰まり¹⁶⁴⁾」を次に見ていくことにしよう。
[訳文、終わり]

・Met.A.4 補注

Met.A.4 補注 a アリストテレスが自分に先行する者を批評する際の言葉「プセリゼスタイ」について

Ross によって「舌足らず」(“lispng”)と訳されたギリシア語の原語「プセリゼスタイ」は、子どものたどたどしいしゃべり方にも用いられる言葉(『動物誌』第四巻第九章五三六 b 八における子どもの未発達な舌としゃべり方との関係の記述)なので、従来、先行者を見下したようなアリストテレスの態度を暗示するものとして読まれてきた。『動物誌』第四巻の例はたしかに子どもについて語っている。しかし、ポイントは子どもであること自体にではなく、舌の未発達さによるその動きの制限・限界にある(このことは、『動物部分論』第二巻第一七章六六〇 a 二六における舌があまり自由に動かない人たちのしゃべり方の記述――ここは議論が子どもに限定されていないことに注意せよ――から明らかである)。これは、おそらく、事柄の自然本性にふさわしい言葉がまだととのっておらず叙事詩の約束事や語彙に拘束された結果の不自由さと類比的である。したがって、ここに、先行者に対する不遜さを読み込もうとするのはいささか性急ではないかと思われる(Ross は、アリストテレスが「ディアルトローシス(「表現」, 直訳は「完全な分節化」)」の欠如としても同じことを表していると指摘している。本巻第五章九八五 b 五 | 六, 第八章九八九 a 三二 (b 五も), B (第三)巻第六章一〇〇二 b 二七を参照。『動物部分論』第二巻第一七章において、それは、アルファベットを分節化して発音できないこととして論じられている)。未発達な言葉による研究の制限ということならば、動物の種の名称を「たどたどしく」語る際のアリストテレス自身にも見られるのである(私の『動物部分論・動物運動論・動物進行論』の訳注で逐一指摘しておいた)。これは、アリストテレスの個人的欠点であるよりは、彼がほとんど独力で切り開いた動物学の学としての「若さ」から来していると言えよう。

Met.A.4 補注 b 985a10 の削除箇所 “[καὶ τῶν κακῶν τὸ κακόν]” (Primavesi 2012 が主張する “α-supplements” の最初に論じられている例)について

底本で削除された部分を「[……]」に入れて復元すれば、「あらゆる善きものの原因が「善そのもの」[であり、様々な悪しきものの原因が悪]であるならば」である。

163) 「以上のすべての仕方、あるいはそのうちのいくつかの仕方」ということ (Menn, 218)。

164) 原語は「アポリアー」。「道(ポロス)」が「なくなり(ア-)」行き詰まること(ア-ポリアー)、途方に暮れ苦しいこと、困難、難問の意。本巻第二章九八二 b 一七以下によれば、行き詰まって途方に暮れながらも、驚いて受けた感銘を忘れられないでいる人(言い換えるなら難問を手放せない人)は自分が無知だと思い知り、その状態を脱すべく「知恵の探求」を開始するのであった。本章と同じく「まとめ」の性格をもつ第一〇章末尾の九九三 a 二六でも、「行き詰まり」を「もう一度振り返ろう」と言われており、「愛知」にとって「行き詰まり」を確認することの重要さがうかがえる。本書B (第三)巻第一章冒頭でも、「行き詰まり」を確認することの大切さが簡単に説明されている。

削除されている部分 “[καὶ τῶν κακῶν τὸ κακόν]” は、信頼度の高い α 系の写本群にあるので、そういう場合は通常であると削除はしないのであるが、アレクサンドロスが注釈で、「悪きものについては [善きもの場合と同じことを] 補うのを彼 [アリストテレス] は私たちに残したのである」とコメントしており (Al. 33,26)、アレクサンドロスが見ていた『形而上学』の本文にはこの部分がなかったことが分かる。おそらくアレクサンドロスの注釈の言葉に示唆を受けて E (α 系の代表的写本) の筆写者がアリストテレスの本文に補ってしまったと推測されている (このことは、Ross 1924, 137 もすでに指摘していたが、Primavesi 2012 が提唱する “ α -supplements” の最初に論じられている例 (440-443) である)。

内容的には、ここでの「見事さ」は、前の文で前提された「たどたどしい表現に惑わされずその意味するところの彼の考えをつかむ」ということであって、「善きものの原因が善で、悪きものの原因が悪である」という仮定に適合しているのではなく、削除部分がなくても議論は続く。

削除された部分を読まない最後の仮定の文章「あらゆる善きものの原因が『善そのもの』であるならば」の入っている意義が少し分かりづらくなってしまいう問題が生じるが、おそらく、ここでの議論にとっては、「善きものの原因は善そのものだ」という結果と原因の同名同義的な対応関係が仮定されれば十分なので、底本が削除した九八五 a-10 の悪きもの場合もいねいに述べた部分は、前の議論に出ていなかったのである。また、アレクサンドロスのコメントは、それを実際に補わないと本文に欠陥があるということではなく、言わずもがななので本文にはなくてもよいのだというつもりだったのであろう。

Met.A.4 補注 c 985b17 の「ディアティゲー」および「ディアテーゲー」という読みについて

名詞「ディアティゲー」は、動詞「ディアティンガネイン」——すなわち「濃厚に触れ合う」という意味——から派生した語であり「相互接触」という意味になると解され、複数の原子の結合の「順序」が原子同士の「相互接触」として記述されるのは自然なことであろうとされてきた。あるいは、Beare 1906, 37, n. 2 によれば、「ディアティゲー」は「ディアティーゲー」であり、これは「ディアテケー」の方言形、すなわち「ディアテシス」の意味（「配置」）で用いられており、「接触」という意味とは等しくなく、私たちのこの箇所期待される意味になる、とも考えられた。

他方、名詞「ディアテーゲー」は、動詞「ディアティテナイ」——すなわち「分けて置く」「並べる」——から派生した語であり「配置」などと解することになる。この場合は、「ディアティゲー」の場合よりも意味が少し遠くなるが、並べた結果としての「順序」を考えることになる。

ただし、「ディアティゲー」の読みを採用する Ross も、次のように考察をしめくくっている。すなわち、それは誤った派生に基づく虚構の語形であって「ディアテーゲー」があらゆる箇所で復活させられる可能性はあるとする。

・Met.A.5 補注

Met.A.5 補注 a 九八五 B 二三の前置詞「エン」について

「同じ頃」と訳した原語「エン」が、Ross 以来、おそらく時間的なニュアンスのある「前に」に合わせて、「～と同じ頃」と意識されている。だが、「これらの人たちの中で (among these thinkers)」と直訳し、「これらの人たち」として原子論者とピュタゴラス学派を一まとめにして両者のつながりを強める案が Schofield 2012, 143, n. 7 で出されている。彼によると、アリストテレスの言いたいことは、ピュタゴラス学派の人たちが文字通りの「最初の数学者」だということではな

く（それは歴史的に誤りでもある）、前章の「万有世界の始原としての原子」の議論からの文脈で、原子論が企てていた「コスモロジー（宇宙論）」を、原子論とは異なる角度から、すなわち「数学的な企て」として扱った「最初の人たち」だということなのである。「第四章の原子論と同様にピュタゴラス学派の人たちもコスモロジーを企てた」という観点、さらに後で紹介するように第三章の「素材」原因論の基礎となるものとそれがこうむる状態との関係さえも視野に入れる姿勢は、この第五章を読み解く上で極めて重要である。ただ、従来のように訳しても、第三章から第五章を密接に結びつける Schofield の解釈戦略は成り立ちうるし、またやはり「～の中で」は「～の前に」とあまりうまく調和しないので、従来の訳し方にしがっている。

Met.A.5 補注 b 『天について』第二巻第一三章の「対地星」についての資料

『天について』第二巻第一三章二九三 a 二〇 | 三〇（ピュタゴラス派の「証言」B 三七（DK））にも、「ピュタゴラスの徒と言われるイタリア派の人々の主張……〔中略〕……〔宇宙の〕中心には火があり、大地は星の一つなので中心のまわりを円運動しながら、昼と夜を造っている……〔中略〕……その上、彼らはわれわれの大地に対立した別の大地を用意して、それを『対地星（アンティクトーン）』と呼んでいる。この場合、彼らは現象を説明するためにその理由や原因を探すのではなくて、むしろ自分たちの理論や意見のために事実を曲げて辻褄を合わせようとしているのである。……〔中略〕……彼らは自分たちの確信を観察される事実ではなくて理論に求めているのである」（池田訳に準拠した。表記を一部変更させていただいた）という箇所がある。ただし、ピュタゴラス派の「証言」B 三六（DK）で、他ならぬアリストテレスの失われた著作『ピュタゴラス学派について』によると、「ピュタゴラス派のうちの或る人たちは……〔中略〕……或る時は大地が、或る時は『対地星（アンティクトーン）』が光をさえぎることによって（月蝕は）起きると説明した」（岩波版に準拠した。一部表記を変更させていただいた）ということであり、月蝕に言及した類似の記述は『天について』からの先の引用の少し後の二九三 b 二一以下にも見られる。裏づけとなる事実として月蝕が挙げられていたのなら、彼らなりの根拠はあったと考えられよう（Ross）。ただし、彼の評言のポイントは、月蝕を説明するために対地星が導入されたわけではなく、対地星が存在することの都合のいい理由として月蝕が利用されている（つまり「或る時には大地が、或る時には対地星が」と言われていたように対地星でなくても月蝕は説明できる）ということであろうし、『天について』二九三 b 二一以下の記述に登場する月蝕が根拠として機能するのは、対地星そのものの存在に対してではなく、「対地星に類する数多くの物体が中心のまわりを動いている可能性」に対してである。

Met.A.5 補注 c 「素材」としての数およびパターとヘクセイスについて

しかし、九八六 a 一七の「パターとヘクセイス」の解釈にも研究者たちは悩まされている。従来の諸説のうちから、注目すべき解釈を提示している Ross, 1924, I, 147-148 を取り上げよう。

彼は、まず、アレクサンドロスの解釈をそもそもアリストテレスのテキストの解釈になっていないと軽いなし、パターは「一時的な変容状態（temporary modifications）」、ヘクセイスは「持続的な変容状態（permanent modifications）」として区別されるということくらいしか分からないと指摘する。

私〔坂下〕自身、「パターとヘクセイス」の区別が、『カテゴリー論』第八章のよく知られた「ディアテシス（一時的な状態）」と「ヘクシス（持続的な状態）」の区別と酷似しており、通常のアリストテレス的存在論の発想で見ても、パターは「一時的にこうむる状態」で、ヘクセイスが「恒常的

な状態」だと想定してかまわないという立場をとっている。

さてそこで Ross は、ここの議論がそもそも四原因説の歴史的な反省であったことを手がかりにする。つまり、「パターとヘクセイス」と呼ばれているものが四原因のどれかに該当するのではないかと想定し、「パターとヘクセイスとして始原」という言葉が「『素材』として始原」という言葉と対置されていることを根拠として、「パターとヘクセイス」は、素材因としばしば対にされる形相因のことではないかと推測するのである。

実際、この章の終わりの部分の九八七 a 二〇以下で、「それで彼らは……〔中略〕……『何であるかということ』についても語り定義し始めた」と言われており、これによれば、ピュタゴラス学派の人たちは形相因を認識し始めたと解してもよいであろうとする。そして、本章の九八五 b 三二で「数以外のものは……〔中略〕……数に『似せられている』と思われ」とあったので、事物が一時的にあるいは恒常的に似せられているところの数が、事物を『それであるところのもの〔本質〕』にするとところのパトスでありヘクシスであると、ピュタゴラス学派の人たちが考えたとアリストテレスは言いたかったのだと Ross は結論する。

ただし、恒常的な状態を表す「ヘクセイス」はともかく、一時的にこうむる状態を表す「パター」が事物の一時的ではない本質としての「形相因」を指しているとする Ross のこの解釈はやはり異様に映るだろう。彼自身も、「ヘクセイス」は「エイデー」の同義語として自然な語だが「パター」は人を驚かせると認めており、証拠となるいくつかの箇所を挙げて「パター」は「エイデー」の同義語として使われうることなどを示そうと努力している。その証拠として挙げられている箇所は、次の四つである。(1)「パトス」が「ポイオテース（どのようであるかということ、性質）」の同義語として使われうる例、『形而上学』M（第一三）卷第八章一〇八三 a 一〇における言い換え。(2)「パトス」が「ディアポラー」の同義語として使われうる例、『生成と消滅について』第一卷第一章三一五 a 九。(3)「パトス」が「エイダス」の同義語として使われうる例、『氣象論』第四卷第五章三八二 a 二九。(4)「パトス」が事物の本質の中の契機（カタルク）の同義語として使われうる例、『動物部分論』第四卷第五章六七八 a 三二。これらのうち興味深いのは三番目の用例であるように私（坂下）には思われた。すなわち、「素材の他に原因は二つある。つまり、『作用しうるもの』（ポイウーン）と『作用を受けうるもの』（パトス）である（それで、『作用しうるもの』とは、そこから運動が始まるその当のもの〔起動因〕のこと、『作用を受けうるもの』（パトス）とは『形相』（エイダス）のことである）」（三浦訳、一部改変、下線による強調は引用者）となっており、「形相」が「パトス」と呼ばれるのは、「能動・受動」という議論の枠内で「受動」の位置を占めるときであり、この場合、「一時的」という含みはないからである。

さて、Schofield 2012, 145-146 は、たしかにピュタゴラス学派の人たちは音程を比という数で把握したので形相因に触れたと言えるが、ただ、そのことはここで「パターとヘクセイス」について語るときのポイントではないと断じる。そして、九八六 a 一五以下の、

[第五章 986a15] 彼ら [ピュタゴラス学派の人たち] も数を以下のように考えているのは明らかだ。すなわち、それは、様々な存在にとって「素材」として始原であり、そして、「[[素材]としての数の] こうむる状態」や「[数の] 恒常的な状態」として始原であると。

における「彼らも」を、Bonitz 1848-49, 80 にしたがって、第四章の終わり近くの、

[第四章 985b10] つまりちようど、基底とされる根本存在を一つだとする人たちが、これ以外のものを、これの「こうむる状態（パター）」によって生ぜしめ、これのこうむった状態として「濃密」や「希薄」を立てている〔アナクシメネスやアポロニアのディオゲネス〕のと同じ仕方で彼ら〔レウキッポスとデモクリトス〕も、その違いが他の様々なものの原因であると主張している。しかしながらこれらの違いは三つあるのだと、彼らは言う。すなわち、「形」と「順序」と「置かれた向き」だ。

の「彼らも」と関連づけて、次のように言う。ここで「ちようどこれと同じ仕方で彼ら〔レウキッポスとデモクリトス〕も」とは、「基底とされる根本存在」としての、たとえば「空気（アエール）」の希薄化と濃縮化で空気以外のものを説明するアナクシメネスらがしているのと「ちようど同じ仕方で」、レウキッポスとデモクリトスも、原子の「形」と「順序」と「置かれた向き」を原子の何らかの意味での「パター（こうむる状態）」——この言葉はここで直接には言われておらず、しかも原子のそのつどの「順序」や「置かれた向き」はともかく「形」がどのようにして原子の「パトス（こうむる状態）」になるのか私（坂下）にはにわかには分かりかね、原子の「形」こそ、ひょっとすると第五章九八五 a 一五以下の「ヘクシス（恒常的な状態）」に該当するのかもしれないと考えるのだが——として扱っているということなのである。それで、第四章のこの箇所と同じ姿勢、つまりタレス以来アナクシメネス以降で明確な形をとった『『素材』とそれの『こうむる状態（パター）』』という図式を使った事物の把握の延長線上に見ようとする姿勢が、第五章の九八五 a 一五以下でも展開されており（その証拠は b 二八 | 二九の「火や土や水のうちによりも」だとされる。その箇所の註を参照）、したがって、数の原因論上の根本的な立場は素材因だと位置づけられ、数以外のすべてが数の「パター」なり「ヘクセイス」なりで説明されていると見てよいのであると。

私（坂下）自身としては、この Schofield の説を、ここで「パターとヘクセイス」について語るときのポイントについての考えに説得力を感じるので、支持したいと思う。

・Met.A.6 補注

Met.A.6 補注 a 九八七 b 四の「ディア・ト・トイウートン」の解釈

Steel 2012, 174, n. 20 は、すぐ後ろの行にある理由文 (b6 の “*ἀδύνατον γὰρ*” 以下) を指すと解する Apelt/Ross 案は採らず、前からの議論を受けると解する Bonitz 案を復活させている。この説は古くからあり、Alex. 50, 7 は “*οὐδὲν*” と端的に言い換えている。トマスも同じ線の解釈だが、もっと内容面に踏み込み、n. 153 で、“*suscepit hoc ad inquirendum in rebus naturalibus*”（「自然物の研究のために、これ [=ソクラテスが倫理において用いた方法すなわち普遍的なものの探求と定義へのこだわり] を受け入れた」とパラフレーズしている。たしかに前からの議論を受けると解した方が、しかも内容的にトマスのような線で「ソクラテスの取り組みを倫理から全自然へ拡張するために」と理解した方が、議論の自然な流れをつくることができると思われる。ただし、もちろんそのためには、さらに前で述べられている「すべての『感覚されるもの』の流転とそれゆえの知識不可能性」が難問として立ち上がってくるので、結局、「自然物の研究のため」という事情の中には、このことも入ってくる。

Met.A.6 補注 b 九八七 b 八の「パラ・タウタ」の「パラ」について

この「パラ」を「～と並んで」と訳す拙訳は、古くからある理解の（後述の Steel による）新しいバージョンに基づいている。従来、「パラ」は「～から離れて」という意味に解されていた。従

来型の理解で訳した場合、「感覚されるものがアイデアから離れて存在する」という文章が出来上がる。しかし、プラトンの場合には、「感覚されるものから離れてアイデアが存在する」のであって、その逆は真ではない。感覚されるものはアイデア「から離れて存在」せずそれに依存しているはずであろう。このように、「～から離れて（英語の“*apart from*”）」という意味に解された「パラ」に「エイナイ」を補うことに Ross は反対し、その補いは困難であって、「パラ」は、(拙訳では「～に基づいて」と訳された)「カタ」と同じく、本文にある動詞「語られる (レゲスタイ)」にかけの方が自然だとする。この場合、「パラ・レゲスタイ」は「～にしたがって呼ばれる (“*called after*”）」と訳され、ここの文は全体として “*and he said the sensibles were called after these and were called what they were called by virtue of their relation to these*” と訳す方が自然だとする。これに対する Steel, 2012, 174-175, n. 23 の考えは、次の通りである。すなわち、Ross の議論は説得的でない。「パラ・タウタ」の後に「エイナイ」を補うのはそれほど困難ではない上に、「パラ」と「レゲスタイ」(言われる)の組み合わせは、単に言われる仕方に過ぎず存在論的含意がない「パローニユマ」(派生的なもの)にこそふさわしい(しかしここでは「パローニユマ」が論じられているのではない)。また、ここで Ross の解釈にしたがうと、アリストテレスの説明の本質的な部分が失われる。すなわち、先にも紹介したように、プラトンの場合には「アイデアは感覚されるものから離れて実在 (exist) する」からである。ただし、「感覚されるものがアイデアから離れて (*'separate from'*) 存在する」という文は Ross が言うようにやはりおかしいので、ここでの「パラ」は厳密な意味での「コーリスタ」(「離在する」という強い意味の言葉)と解するべきではない。アリストテレスは、単に(言わば弱く)、「感覚されるものがアイデアと『並んで』 (*'beside'*) 実在する」と言っているだけなのである。

Met.A.6 補注 c 九八七 b 一〇のアイデア論に関する一文について

Primavesi, 444-446, TEXT16 によって解釈の状況をまとめれば以下ようになる。ここでの「シュノーニユマ」は、「同じ名称と同じ定義をもつ」というアリストテレス的な意味を担っているのでなければならない。なぜなら、プラトンは「シュノーニユマ」を使うことが全然ないからだ。しかし、「ホモーニユマ」の方は、「同じ名称をもつが同じ定義はもたない」というアリストテレス的な意味を担いえないだろう。ここで描写されているアイデア論に反するからである。むしろ反対に、「ホモーニユマ」の方は、プラトンの意味を担っているのでなければならないであろう。これはアリストテレス的な「シュノーニユマ」の意味を含む。(α系写本における)相互に排他的な用語法 || アリストテレス的な「シュノーニユマ」とプラトンの「ホモーニユマ」|| のこの混合物がアリストテレス自身にまで遡ることはありそうにない。さらに、アレクサンドロスの注解は、彼が使っていたテキストにはここに「ホモーニユマ」はなかったことを示している。「ホモーニユマ」がない場合に「トイス・エイデシン」は二つの仕方で解されうる。(一)「トイス・エイデシン」を「トーン・シュノーニユモン」にかける。訳は、

「アイデアと同名同義のもの的大部分が存在するのは [そのアイデアの] 分有によるからだ」

となる。

(二)「トイス・エイデシン」を「エイナイ (存在すること)」の原因と解する。訳は、

「[互いに] 同じ名前・同じ意味のもの的大部分がアイデアによって存在するのは [そのアイデアの] 分有

によるからだ」

となる。

そして（一）は除外されうる。なぜなら、「アイデアと同名同義のもの」は、「大部分」ではなく「すべて」が、そのアイデアの分有によって存在するということが、直前の文（「すべての『感覚されるもの』はアイデアと並んで〔存在し〕しかもアイデアに基づいて語られる」）を読めば分かるからである。

それで、（一）には改善案（一改）が出されたことがある。すなわち、（一）のもとの案が問題を引き起こしたのは「トーン・シュノーニューモン・トイス・エイデシン」を部分属格に解したから、つまり、「アイデアと同名同義のものうちの」たとえ「大部分」であるにせよやはり一部にすぎないものだけがそのアイデアの分有によって存在すると言うはめになったのだから、次のようにすればよい。すなわち、

（一改）属格を部分属格ではなく補足的属格に解せば、「うちの」というニュアンスが消え、「アイデアと同名同義のもの」の一部だけをピックアップしなくて済む。そしてそのことによって「タ・ポツラ」も「大部分」ではなく単に「多くのもの」――直前の文章との関係では「多くの感覚されるもの」――という意味になり、それに「アイデアと同名同義のもの」と補足されたことになる。訳は、

「多くの感覚されるものが、すなわちアイデアと同名同義のものが存在するのは（そのアイデアの）分有によるからだ」

となる。

だが、この（一改）案において鍵となる「属格の限定用法」（補足的属格）は、Ross によって「不可能」と評された。また、そもそもアイデア論において、「アイデアを分有して同じ名称・定義をもつもの（シュノーニューマ）」と「アイデアを分有せずに同じ名称・定義をもつもの」を区別することは重要な問題であり、アリストテレスがこの問題に気づいていることは、たとえば第九章九九〇b二七―三四から明らかであるから、「シュノーニューマ」に部分的に言及することは、ここでは全く歓迎されるのである。したがって、解釈（二）だけが可能であると結論すべきなのである。

私（坂下）のここでのちょっとした疑問は、少数の（おそらく唯一の）「アイデアを分有せずに〔感覚されるものと〕同じ名称・定義をもつもの」が何なのかはっきりとは言われていないことである。おそらくはアイデアそれ自体であろうか（たとえば美のアイデア以外のものが「美しい」と言われるのは美のアイデアを分有することによるが、美のアイデアが「美しい」と言われるのは美のアイデアを分有することによってではなく自分自身によるから）。

Met.A.6 補論 d 九八七 b 二二における『アイデア』と『数』について

最新の注解の Steel, 2012b で該当する部分（186-188）は、Reale, 1968/2004, 742 とほとんど同じである上に、Steel では従来の説（特に従来の説（三）と（四）の問題点が分かりにくいので、まず Reale を（私の補足説明も交えながら）引用し、次に Steel（彼の Reale 批判を含む）を見てから、Steel への私の態度を示すことにする。

Reale, 1968/2004, 742, Commentario, Met.A.6 の該当部分

〔九八七 b〕二一行目以下の読みは非常に議論を呼んでおり、……研究者たちの意見は完全に分かれ

ている。[従来の説(一)] 幾人かは「タ・エイデー」の削除を望んでいる (Zeller, Ross), [従来の説(二)] 他の人たちは「トゥース・アリトムース」の削除を望んでいる (Christ, Jaeger)。[従来の説(三)] さらに他の人たちはまだテキストの現状維持を望み, 「アリトムース」を「エイデー」の同格 (*apposizione*) と解す (Bonitz, Robin, Stenzel 他)。[従来の説(四)] Jackson は「タ・エイデー・エイナイ・タ・ホース・アリトムース」と「トゥース」を「タ・ホース」に改訂する。—— [批判一] 一つ目の提案は説得力がない。なぜなら, 「[九八七 b] 一八からしてこの箇所には数ではなく「タ・エイデー」に言及することを期待するから (九八八 a 一一)」(Jaeger, *Metaph.*, p. 19)。[批判二] しかし, 次に, 二つ目の提案は, Ross の反論 (*Metaph.*, I, p. 172) に対して弱みをさらしており, 且つ「アリトムース」がもともとは欄外注記だったという Jaeger の説明には説得力がない。[批判三] 三つ目の提案は文法的に成り立たない。[批判四] 最後 [Jackson 説] の場合, 人は, 「端的な (*simpliciter*) エイデー」と「数としての (ホース・アリトムース) エイデー」の区別を想定するが, それはテキストにはないものである [坂下注記: 従来の説(四)は, アリストテレスのテキストの写本ではなく, アレクサンドロス の注解文中にある文「エイポーン・デ・『タ・エイデー』・プロセテーケ・『トゥース・アリトムース』(彼 [= アリストテレス] は, 『エイドス』と言った上で, 『数』と付け加えた)。「タ」・ガル・ホース・アリトモイ・『エイデー』・ハイ・イデアイ (なぜなら「数としてのエイドス」が「イデア」なのであるから)】(53, 9-10) に基づいており, (四) のようにするとアレクサンドロスの注解によって「汚染」された本文を作ってしまうことになる]。—— [Reale の判断] さて事情は以上のようなのであるから, アスクレピオス (*In Metaph.*, 48, 15) の読み「タ・エイデー・エイナイ・〈カイ〉・トゥース・アリトムース」の「カイ」が行き詰まりを脱出する道となるように私たちには思われる。私たちの意見では, これが事情をよりよく説明するはずなのである。アリストテレスは, まず (*prima*) 諸々のエイドス (*Forme*) について, すぐ後で (*subito dopo*) 諸々の数 (*Numeri*) について, そして次にまた (*e, poi, ancora*) それらエイドス (*Forme*) について話している。[Reale 自身の意見: **Version 1**] だから (*quindi*), 私たちの箇所は, 諸々のイデア (*Idee*) すなわち (o) エイドス (*Forme*) も (e) イデア数 (*Numeri ideali*) 〈も〉 (〈e〉) [坂下注記: このイタリア語の「〈エ〉」がギリシア語の補い「〈カイ〉」に相当するのであろう。ただし, 「〈カイ〉」の一語が補われただけで「e…〈e〉…」と訳すのは少々厳しいのではないか(仮に「……〈テ・カイ〉……」のように「〈テ〉」も補われていたなら「〜も〜も」と訳すことに何の問題もなかったのだが, 「〈テ〉」まで補う原文校訂上の根拠はない)。それゆえ, 次の「いっそう正当化されうる」案が提示されるのであろう。] 指示された始原から由来するということを言っているはずなのである。[Reale 自身の意見: **Version 2**] いっそう正当化されうるのは二重語法 (*doppia dictura*) 「エイデー・〈カイ〉・アリトムース」であるが, ただし, 今日ほとんどすべての研究者がそれを認めるように, イデアとイデア数が絶対的な意味では同一ではない限りにおいてである。[下線による強調は引用者(坂下), イタリア語原文での傍点は原文のイタリックに対応]

さて, Steel は, 「従来の説(一)と(二)」については Reale と同じ判断をはっきりと示している(「タ・エイデー」を削除するのも「トゥース・アリトムース」を削除するのも前後の文脈を考慮するとどちらも難しいとしている)ののだが, 「従来の(三)と(四)」は紹介するだけで自分の判断を示していない (Reale は示している)。Steel の「(五)」が, Reale 説の紹介と批評になっているのだが, 一見 Reale を批判しているようであり, 実質的には同じ結論になっており, 若干不親切である。

Met.A.6 補注ノート

987b10 の難読箇所（「メテクシスによって云々」）について：邦訳3種の比較など
ギリシア語の校訂テキスト：

大きく分けると、「シュノーニユモン」削除派と「ホモーニユマ」削除派の二つに分かれる。少数派として「トイス・エイドシン」削除案（Gillespie）が出て Ross が最初はこの案に賛成したが後に撤回した。この語はすべての写本に登場するため、現在では削除は適切ではないというのが研究者の共通了解になっている。

Ross : κατὰ μέθεξιν γὰρ εἶναι τὰ πολλὰ [τῶν συνωνύμων] ὁμόνυμα τοῖς εἶδεσιν.

Jaeger : κατὰ μέθεξιν γὰρ εἶναι τὰ [πολλὰ τῶν συνωνύμων] ὁμόνυμα τοῖς εἶδεσιν.

Primavesi : κατὰ μέθεξιν γὰρ εἶναι τὰ πολλὰ τῶν συνωνύμων [ὁμόνυμα] τοῖς εἶδεσιν. — Primavesi のこの本文は、実はギリシア語テキストが Schwegler 1847-48, I, 21 と全く同じである。ただし訳が Primavesi と異なっており、Schwegler 1847-48, II, 14 は “denn das Viele, mit den Ideen Gleichartige, habe sein Seyn nur vermöge seiner Theilnahme an den Ideen.” と訳しているのである。これは、“τοῖς εἶδεσιν” の処理（Ross と同じである）と “τὰ πολλὰ” の処理（これも Ross と同じである）が Primavesi と明らかに異なっている。

ギリシア語の写本上の読み：α系写本群とβ系写本群に分かれる。

α: τὰ πολλὰ συνωνύμων ὁμόνυμα

Primavesi の apparatus でのラテン語の簡単なコメント：

verbum ὁμόνυμα sensu Platonico adhibitum e margine intrusum esse videtur

（「ホモーニユマ」という語はプラトン主義的な意味に利用され欄外から [本文へ] 押し込まれたように思われる）

β: τὰ πολλὰ συνωνύμων

邦訳1：藤澤訳

「というのは、アイデアと同じ名で呼ばれるところの多くの事物は、そのアイデアにあずかることによって存在するからである（訳注1）。」

《訳注1》「たとえば、多くの「美しい」事物は、「美」のアイデアにあずかること（メテクシス）によって美しい事物として存在する。|| なお以下において、アイデアをあらわす語として「アイデア」と「エイドス」が混用されるが、訳文では「アイデア」で統一する。」

邦訳2：岩崎訳

「そのゆえはアイデアと同義 [Ross の新版注解の読み「ホモーニユマ」を採用しているのではないので注意] なる多くのもの（訳注35）は、アイデアへの関与

私のコメント:「なる」は助動詞「なり」（断定）の連体形で、現代語にすれば「……である～」だから、現代的に訳せば「アイデアと同義である多くのものは」となる。これは同格を表しているのだろうか。とすれば、岩崎訳を現代に活かす訳し方としては、たとえば、「アイデアと同じ呼び名をもつものとしての多くのものが存在するのは「分有」によるのだと」とすることが考えられる。しかし、Ross の読み「ホモーニユマ」なら、これが、その前にある「タ・ポツラ」の中性複数主格の同格だというのは十分に理解可能で納得がいくのだが、岩崎は Ross の読み「ホモーニユマ」を採用しているのではないようなので（「同義」に「シュノーニユマ」という

ルビを打っている)、「シュノーニュモン」という属格を採用しているとすれば、属格の用法として「同格の属格」がなければならない。そういうものはあるのだろうか。あるいは「シュノーニュマ」という中性複数主格を提案しているのだろうか？ 訳注によれば、そのような提案はしていない。属格で読んでいる。

《訳注 35》「ロスのテキストにおいては κατὰ μέθεξιν γὰρ εἶναι τὰ πολλὰ τῶν συνωνύμων の次の τοῖς εἶδεσιν が除去せられ、「多くのものはそれらと συνώνυμα なるアイデアへの関与によって存在する」と訳さるべきであるとする [坂下注記：これは Ross の旧版注解であるので彼の新版注解とは異なる]。彼はプラトンにおいて、アイデアと同義なるものは、単にその多くがではなくすべてがアイデアに関与するものであるということから、τὰ πολλὰ τῶν συνωνύμων τοῖς εἶδεσιν を「アイデアと同義なる多くのもの」と読むことに困難のあることを指摘しているのである。しかしながら τὰ πολλὰ (多くのもの) を「すべてのもの」ということから区別して用いられているものと考えず、ただ漠然と一者に対する多数者を意味すると解すれば、ロスの考えるごとき困難はないと思われる。それゆえ今は従来の一一般のテキストのままに従っておいた。」

邦訳 3：出訳

「けだし、或るアイデアと同じ名前をもつ多くの感覚的事物は、そのアイデアに与^{あず}かることによって、そのように存在するというのであるから。」

出訳は、この箇所^に訳注なし。

[987b9] すなわち、

Ross, Oxford 訳の訳し方 (少し前から引用する) :

“Things of this other sort, then, he called Ideas, and sensible things, he said, were all named after these, and in virtue of a relation to these;

以下が問題の部分の訳である。

[987b10] for the many existed by participation in the Ideas that have the same name as they.”

[987b10] アイデアと〈同じ名前をもつ (ホモーニュマ) ところの多くのもの〉が存在するのはそれらのアイデアの「分有 (メテクシス)」によるからだ。

Primavesi, 444-446, TEXT 16 の訳し方 :

“for he thought that it is by way of participation that most of the things which are synonymous with each other exist by means of the respective Forms.”

[987b10] 〈互いに同名同義のもの (シュノーニュマ)〉の大多数がアイデアによって存在するのは「分有 (メテクシス)」によるからだ。

Ross 訳と Primavesi 訳の相違点すなわち解釈上の争点は、次の通りである。

(一)「ホモーニュマ」を残して「シュノーニュモン」は削除する (Ross) か、「シュノーニュモン」を残して「ホモーニュマ」は削除する (Primavesi) か。仮に両方残すとすればどう訳すことになるか考えられたこともある (Tricot の訳注において)。

(二)「タ・ポツラ」を残すとして、「多くのもの」と読む (Ross) か、「大多数のもの」と読む (Primavesi) か。(Jaeger は「ポツラ」も削除する。)^{「大多数」と解すると直前で「すべて」と言われていたこ}

ととコンフリクトを起こすとされていたので、この困難に対処する必要がある。

（三）非アリストテレス的な意味で単に「同じ名をもつ（ホモーニューマ）」のであるにしる、アリストテレスの『カテゴリー論』第一章的な意味の「同名同義（シュノーニューモン）」にしる、これらの各々に、「トイス・エイデシン」を関係させる（Ross）——訳すと「アイデアと同じ名をもつ」となる——か、関係させない——この場合「トイス・エイデシン」は〈「存在する」ことの原因〉として「エイナイ」に関係させる、つまり訳すと「アイデアによって存在する」となる——か（Primavesi）。

Steel, 174 の訳し方：

“For the many things that have the same name as the Forms, exist through participation.”

[987b10] アイデアと〈同じ名前をもつものところの（シュノーニューモン）〉多くのものが存在するのは「分有（メテクシス）」によるからだ。

私のコメント：この訳し方だと、原文で「ホモーニューマ」と読むか「シュノーニューモン」と読むかの違いこそあれ、結局は Ross Oxford 訳と同じことになるのではないか。

Bonitz 1890の独訳：“denn durch Theilnahme an den Ideen existire die Vielheit des den Ideen gleichartigen.”

・Met.A.7 補注

Met.A.7 補注 a 九八八 b 一三の「ウーシアー」の別の解釈

このように理解しないのが Menn, 203 で、彼の解釈は拙訳の正しさを反対の側から明らかにしてくれる。彼は、「存在したり生じたりする」の主語を「ウーシアー」とする Ross の訳し方をせず、主語としてわざわざ “[anything]” を補う。なぜそのような補いをするのか。Menn は、「ウーシアーの原因」という言葉が「形相因」を表していると考えており（“a cause of οὐσία [i.e. a formal cause]”）、したがってこの「ウーシアー」を「形相」と言い換え可能な「本質」のことだと理解していることは確実である。そうすると、本質を「生じたりする」の主語にすることはできないと彼も（私と同様に）考えたはずだからである。

しかし、ここで “[anything]” を補うのは不可能ではないにしても不自然であり、Ross の訳し方の方がはるかに自然である。そのような無理をする理由が「ウーシアーの原因」を「形相因」として解そうとする意図にあるならば、ここでの「ウーシアー」を「本質存在」と解すること自体に問題があったのではないだろうか。

Met.A.7 補注 b 九八八 b 一一 | 一三の別の訳し方について

Menn, 203 の新しい訳し方では、「そして、同じように、『一』あるいは『存在』が存在すると言う人たちもまた、そのような自然本性のものが本質存在の原因であるとは主張するが」となる。

この訳し方のメリットは、先行する部分にある「或る人たちは「知性」あるいは「愛」を語りながら」とかなりきれいに対応させられる（「存在する」にあまり意味がないので「別の人たちも『一』あるいは『存在するもの』を述べながら」と実質同じなる）こと、そして従来訳「『一』あるいは『存在するもの』が、そのような自然本性のものであると述べる人たちも」では「そのような」がどこを指すのか不明確である（拙訳では Ross の訳し方 || “the One or the existent is the good”

||で理解した)が、新しい訳し方だと、「そのような」に、直前の「『一』あるいは『存在するもの』」のような、という明確な意味をもたせられることである。

デメリットは、Menn 本人も告白しているが、「『存在』が存在する」はこの「別の人たち」をあまりにも漠然とさせてしまうことである。

それで私の判断であるが、Menn の訳し方は、メリットの一つ目にはあまり魅力がなく、二つ目の「そのような」があいまいだという点はアリストテレスではしばしばあることだからそのままでもかまわず、結局デメリットの方が大きいと考える。

文献

- Allan, D.J., 1960, Aristotle and the Parmenides. In: Düring and Owen, 1960. 133-144.
- Alexander Aphrodisiensis, 1891, In *Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. M.Haydock. (*Commentaria in Aristotelem Graeca*, Vol. I), Berlin.
- Apostle, H.G., tr., 1966, *Aristotle's Metaphysics. Translated with Commentary and Glossary*. Bloomington and London.
- Asclepius, 1888, In *Aristotelis Metaphysicorum Libros A-Z Commentaria*. ed. M.Haydock. (*Com. in Ar. Gr.*, Vol. VI-2), Berlin.
- Beare, J. I., 1906, *Greek Theories of Elementary Cognition from Alcmaeon to Aristotle*. Oxford.
- Betegh, G., 2012, 'The Next Principle' (*Metaphysics A 3-4*, 984b8-985b22). In: Steel, 2012. 105-140.
- Bonitz, H., 1848-49/1992, *Commentarius in Aristotelis Metaphysicam*. 2 Vol. Bonn. (Reprint: Olms Verlag, Hildesheim/Zürich/New York)
- Bonitz, H., 1870, *Index Aristotelicus (Aristotelis Opera Omnia, Bd. 5)*. Berlin.
- Bonitz, H., 1890, *Aristoteles Metaphysik. Aus dem Nachlass herausgegeben von Eduard Wellmann*. Berlin.
- Delatte, L., Rutten, Chr., Govaerts, S. et J. Denooz, edd., 1984, *Aristoteles Metaphysica: Index Verborum, Listes de Fréquence*. Hildesheim · Zürich · New York.
- Denniston, J.D., 1934, *The Greek Particles*. 2nd ed. Oxford.
- Düring, I. and Owen, G.E.L. edd., 1960, *Aristotle and Plato in the Mid-Forth Century*. Göteborg.
- 藤澤令夫 訳〔部分訳〕. 1972年, アリストテレス「形而上学」第一巻〔第七章まで〕, 世界の名著『ギリシアの科学』所収, 中央公論社, 123-152。
- Hiller, E., ed., 1897, *Anthologia Lyrica*. (Teubner) Leipzig.
- 出隆 訳〔全訳〕, 1959年, 『アリストテレス「形而上学」』, (上)(下)全二冊, 岩波文庫。
- 岩崎勉 訳〔全訳〕, 1994年(単行本初版は昭和17年), 『アリストテレス「形而上学」』, 講談社学術文庫。
- Jaeger, W., ed. 1957, *Aristotelis Metaphysica*. (Oxford Classical Texts) Oxford.
- Kirk, G.S., Raven, J.E. and Schofield, M., 1957 (1st. ed.)/1983 (2nd. ed.), *The Presocratic Philosophers: A Critical History with a Selection of Texts (Second Edition)*. Cambridge University Press./ 邦訳: G・S・カーク, J・E・レイヴン, M・スコフィールド 著, 内山勝利 木原志乃 國方栄二 三浦要 丸橋裕 訳, 2006年, 『ソクラテス以前の哲学者たち 第2版』, 京都大学学術出版会。(引用や言及は邦訳版を用いる。)
- Lawson-Tancred, H., tr., 1999, *Aristotle Metaphysics. Translated with an Introduction*. (Penguin Classics). London.
- Menn, S., 2012, Critique of Earlier Philosophers on the Good and the Causes (*Metaphysics A 7-A 8 989a18*). In: Steel, 2012a. 201-224.
- Primavesi, O., 2012, Aristotle *Metaphysics A: A New Critical Edition with Introduction*. In: Steel, 2012. 385-516. [底本]
- Reale, G., tr., 1968 (分冊本初版)/2004 (合本新版), *Introduzione, Traduzione e Commentario della "Metafisica" di Aristotele*. Milano. [2004年の合本新版を用いる]
- Reeve, C.D.C., tr., 2016, *Aristotle Metaphysics. Translated with Introduction and Notes*. Indiana.

- Rolfes, E., tr., 1904, *Aristoteles' Metaphysik. Übersetzt und mit einer Einleitung und erklärungen versehen*. 2 Bde., (PhB, 2&3), Leipzig.
- Ross, W.D., ed. 1924, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text With Introduction and Commentary*. 2 vols., Oxford.
- Ross, W.D., tr. 1928, *Metaphysica*. 2nd ed. (*The Works of Aristotle*, Vol. VIII), Oxford.
- Saba, U., 1945/2014, *Il canzoniere 1900-1954*. Torino.
- 坂下浩司, 2002, 『アリストテレスの形而上学——自然学と倫理学の基礎——』, 岩波書店, 東京。
- Schofield, M., 2012, Pythagoreanism: emerging from the Presocratic fog (*Metaphysics A 5*). In: Steel, 2012. 141-166.
- Schwarz, F.F., tr. 1970, *Aristoteles Metaphysik: Schriften zur Ersten Philosophie*. Stuttgart.
- Schwegler, A., 1847-48, *Die Metaphysik des Aristoteles: Grundtext, Übersetzung und Kommentar*. 4 Bde. Tübingen.
- Steel C., ed., 2012, *Aristotle's Metaphysics Alpha. With a new critical edition of the Greek Text by Oliver Primavesi*. Oxford.
- Steel C., 2012b, Plato as seen by Aristotle (*Metaphysics A 6*). In: Steel, 2012. 167-200.
- 須賀敦子, 『全集』第7巻, 2000 (単行本版) /2008 (文庫版), 河出書房新社, 東京。[文庫版を用いる]
- Syrianus, 1902, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. ed. G. Kroll. (*Com. in Ar. Gr.*, Vol. VI-1), Berlin.
- 多和田葉子, 1993 (単行本版) /1999 (文庫版), 『文字移植』, 河出文庫, 東京。[文庫版を用いる]
- 田中美知太郎・藤澤令夫 編, 1974-78年, 『プラトン全集』全15巻・別巻1, 岩波書店, 東京。
- Thomas Aquinas, 1950, *In duodecem Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio*. ed. Cathala, M.R. et R.M.Spiazzi, Roma.
- Tredennick, H., tr. 1933, *Aristotle Metaphysics: Books I-IX*. (Loeb Classical Library). Cambridge and London.
- Tricot, J., tr. 1986, *Aristote La Métaphysique. Nouvelle Édition Entièrement Refondue, avec Commentaire*. 2 vols. Paris.
- 内山勝利 編, 1996-1998年, 『ソクラテス以前哲学者断片集』全5分冊・別巻1, 岩波書店。
- 内山勝利・神崎繁・中畑正志 編, 2013年 - (刊行中), 『アリストテレス全集』全20巻・別巻1, 岩波書店。[「新・アリストテレス全集」と呼ぶ]

- ・本訳と注解は、平成30年度～令和4年度科学研究費基盤研究（C）（一般）課題番号18K00022 研究課題名「哲学の勧め及び哲学の歴史と歴史の哲学に関するアリストテレスの第一哲学構想の研究」の研究成果の一部である。